

「春のJBA」 2009年3月26日～30日

講題：『君に生きる力はあるか』

講師：岡本英夫先生



『生きる 今を 共に』

総務さんの方から出されたテーマは『生きる、今を、共に』ということでしたね。「生きる」ということがテーマに出されましたので、そのことについて私の感想を少しお話しさせてもらいたいと思います。

私の考えました題名は『君に生きる力はあるか』です。生きるのにも力がある。「力があるのが当然だと思いますか?」「力などなくても自然に生きることができると思いますか?」しかし、どうも生きるのにはかなりの力があるような感じがします。

その力というのは深い内容があるようで、私もその全体はよくわかりません。よくわかりませんが、少なくともこういう力は大事なのではないかなと、普段思っている所を少しだけお話しします。

ですから、私がお話しするのは、生きる力の全部ではありません。その一部。皆さんがこれから生きていく上で、いろんな力を自分のものにしていかれると思いますが、その時のヒントにして貰えればありがたいと思います。

一応大きく分けて、4つほどの力を考えてみました。第1が「おもう力」(こころの力)ですね。

一、おもう力 (こころの力)

「おもう」というのは、漢字で書けばいいのですが、いろんな漢字がありますから、今は平仮名ひらがなにしておきます。

私たちは当然のことながら心を持っています。他の動物はどうかというのはよく分かりませんが、それはそれとして、私たちの場合を考えれば、人間は心を持っています。このことが大変な問題なのです。心というものを疎かおろそにしてはいけません。心を鍛えきた、大事にし、力をつけていかなければいけません。こういう問題が基本的にあると思います。

先ず、こころはいろいろなことをいろいろに思うわけですね。その「おもう」思いう方というのが大事。そこにしっかりとした力をつけて、正しくものをおもうということです。具体的に考えてみますと、先ず自分のことをおもう。

①自分自身のことをおもう。

私には、現在げんざい、過去かこ、そして未来があります。皆現在と過去と未来を持っています。皆さんの過去はそう長くないですね。長い感じがしますか。皆さんの場合はこれから長いですね。私や後ろに座っている方々の方は過去が長い。それで口を開けば「昔はこうだった」。君たちは口を開けば「自分は将来はこうする」と未来の話をするでしょう。そこで自分自身のことをおもってみる。

ちょっとやってみましょう。現在のことを。今現在、皆さんはここにそのように座っているのですが、昨日、朝起きてからの一日と、今ここまでの何時間か、それを

ずっと振り返ってみましょう。振り返る時に、その場その場で自分がどんな思いを起こしたか。朝早く起きようと思って寝たのに、お母さんが起こしてくれずに腹が立ったとか。いろんな思いがあるでしょう。時間が来たのにまだ荷物ができないとか。いろいろあるでしょう。

それはほんの一日の時間なんです。君たちの過去十何年のこと、これをおもってみる。家に帰ったらやってみて下さい。できたらそれを書いてみて下さい。最初はあまり思い出せないし、的確てきかくに書けないかも知れませんが、またしばらくして書いてみて下さい。自分が変わりますよ。自分がわかってくる。

それから、未来があります。それは大きな夢を持って、大きな希望を持って頑張つてやるべきものです。そういう自分のことをおもう。しっかりと自分自身のことをおもう。そしてついに、自分とは一体何だろうかとおもっていくのですよ。

②人のことをおもう。

私たちの周りには当然たくさんの人がいて、家族、友達、先生、その他たくさんたくさんくさんの人がいます。自分以外のその人たちのことを思うのは、自分をおもうのとくらべて随分ずいぶん雰囲気ふんいきが違いますよ。時間がある時にいろいろ思ってみて下さい。

皆さんの年齢では十何年位でそれほど長い人生ではありませんが、例えば、お父さんお母さん、おじいさんおばあさん、あるいは、歴史上の人物などの本を読んだり、テレビを見たり、学校の授業でも出てきたりしていろいろな人に出会ったでしょう。そういう人は大体生涯だいたいしやうがいが終わっていますから、ずっと全体を見ることができるようですよ。それをずっと追っていく。一人一人の人生は本当に違います。一人の人の生涯しやうがいを書いた一冊の本を読めば、何をした人かを知っているような人でも、一冊本を読んだら必ず詳しく書いてありますからね。「こうだったのか」知らなかった、とね。

この間、テレビで「あなたは広田弘毅ひろたこうきを知っていますか」というのがありました。ちょっと知っていたけれども、どんな人かなと思って見てみると、「こういう人だったのか」と驚きました。そういうことがいっぱいありますね。

そのように、亡くなった人はじっとしていますから、ある意味で「どうぞ私の人生をみて下さい」と待っているような人です。その人のことをいろいろ調べたり読んだりして、ずっと見て行って、一人の人の人生とはこうなのかと。それからまた別の人は随分ずいぶん違った人生を生きている。その初めから終わりまでをずっと見ていくということも大事なことです。「人のことをおもってみよう」。

自分自身もそうですが、人の一生を思う時にいろんなことがそこで出てきます。その時代、その時代が作っている社会。今は平成 21 年ですね。その前は昭和という時代でした。昭和 20 年まで、今から 64 年前までは、日本は長い間、15 年くらいかけて戦争をしていました。結局何百万という人がその戦争で死にました。日本の軍隊の人も死んだ。軍隊ではない一般の市民も死んだ。大変な空襲くうしゅうもありました。日本の軍隊がよその国へ行ってたくさんの人を殺しました。殺した人の数のほうが日本人の死よりも多いんですよ。本当に大変なことがありました。それを 15 年間日本は

やめなかったんですよ。そういう時代を生きた人がいるわけですね。どんな気持ちで生きたのでしょうか。

さらに、そのような時代の中であって具体的な生活はどうだったのか。その中でどんな人と、どんな出来事に出会ったのか。出会ってその人はどう変わったのか。学問はどうだったのか。あるいは仕事や病気はどうだったのか。このようなことについては、本当にさまざまなことがあります。こういうことは、私たちも若い皆さんもこれから体験していくことですね。

これは人をおもうということ。次に、このことと^{かんれん}関連するかもしれませんが・・・。

③異なった世界のことをおもう。

今、私たちは21世紀の日本という国を生きている。しかし世界はこれだけではありません。違った時代もある。古くはどのくらいにさかのぼればいいのか。何千年位前としておきましょう。何千年前から人類は様々な生き方をしてきた。時代によってどんどん変わるので、不思議なものです。時代がどんどん変わっていくというのね。

私が子供の頃はラジオしかありませんでした。ラジオを一生懸命^{いっしょうけんめい}、息をとめるようにして聞いていました。テレビを買ったのは中学二年生のころです。その頃のテレビの代金は、私の父の給料の数カ月分でした。今で言えば車を買うくらいの感じだったのですよ。だから最初にテレビを買った時は、大変なお客さんを迎える感じでテレビが我が家に来ました。あの時のことをよく覚えています。あれから何十年もたつて、時代はどんどん変わりました。そのように過去の時代、今とは随分違う時代のことを思ってみる。

江戸時代はどうだったのでしょうか。今トイレでどんどん流しますけど、あれが江戸時代は商品だったんですよ。ものすごくいい肥やし^こですから、あれを売買^{ばいばい}していたんです。いろんな時代でいろいろ違いますね。

それから、私たちは日本という国を生きていますが、今現在、国がいくつあるか。日本が承認している国は193カ国です。人口が13億を超える中国や、それに次ぐインドなどの大国もあれば、小さな国もあります。バチカン市国などは領土は1キロ四方に満ちません、人口も1000人以下です。

「外国へ行ったことのある人?」「ありますか?」いろんな国へ行くと、そこの空気が違うような感じがしますね。インドにはインド独特^{どくとく}の空気があります。その空気というのが匂い^{にお}ですね、匂いが違うんですよ。インドはコショウのような香辛料^{こうしんりょう}のような匂いがどこかします。アメリカへ行くとバターのような匂いがします。ヨーロッパへ行くと割といい香りのような感じがします。雰囲気^{ふんいき}というのは面白いものです。その国の人^にがその国のその雰囲気の社会の中で生きている。同じ人間なんだけれど、違うんですよ、そこがね。

だから様々な文化や習慣^{しゅうかん}の違いもあるのです。私たちは「いい子いい子」と頭をなでますが、そんなことをしたら「バカ者!」と言われる国もあります。文化がずいぶん違いますね。

民族の違いもあります。日本はわずかな民族しかありませんから、私たちはほとんど実生活の中でこれを痛感^{つうかん}することはないようですが、ヨーロッパなどに行けば大変です。一つの国あるいは一つの世界という単位で人の生き方に決まりを作って私たちは生きています。そこで皆が決まりを守ればいいのですが、その決まりがなくなると、「あなたの好きなようにしなさい」と言った途端、民族の違い、国の違い、こういうもので人は喧嘩^{けんか}を始めやすいのです。ちょっとでも違っていたら喧嘩するんですね。

今から20年近く前までは、世界は東西冷戦^{とうざいれいせん}の状態でした。アメリカの陣営と当時のソ連の陣営とで、世界が大きく二つに分かれていた。第三陣営というのもアフリカ・イスラム系を中心にあつたのですけどね。両陣営が大きな戦争は直接しないけれども、睨み合^{にら}って冷たい戦争をやっていました。

その対立が、今から20年位前に終わった。終わった途端^{とたん}、東西の二つの枠^{わく}に分かれていた世界が、枠^{わく}が無くなってみると、無数の枠^{わく}に分かれていきました。喧嘩^{けんか}を始めたのです。民族と宗教で対立し争い分かれていくのです。今のこの場で言えば、お前は山口県、お前は福岡県、俺は広島県と、これで喧嘩をするようなものです。

そのようないろいろな違いがあつて、地球という星の上で、今は68億という人が住んでいます。何千年、何万年前から人々の間の様々な違いがどんどん進んで行って、今こういう状態なのです。そのようなものを出来るだけおもってみる。

おもうためには、そのことについて知らなければいけません。だから本を読むことをしなければいけない。そうすると本当にいろんなことがわかってきます。

さて、それからもう一つおもうもの。これは全体に関わる^{かが}ようなものです。

④生成発展^{せいせいほつてん}のすがたをおもう。

生成発展^{せいせいほつてん}という意味は、生きているものはどんどんと変わって成長していくということですね。人もどんどん大きくなって行って、中身も豊かになっていきますね。自然もそうです。種を蒔^まけばどんどん大きくなっていきます。ものがじっとしていずに、どんどん変わって大きくなっていくその姿を思うということです。

人を見て、その人は15歳だとすれば、今15歳の姿なんだけれども、小さい時はこうだったんだろうな。だんだん大きくなったらこうなっていくんだろうなと「人のことを思う」。

「自分自身のことも思う」。「自然についてもいろいろ思う」。その「生成発展の姿を思う」ということも大事です。これを少しやってみましょう。いいですか。分り易いように自然界のもので思ってみましょう。

樹木^{じゆもく}。小さな3センチくらいの苗木^{なえぎ}を植えます。この大地に、その苗木がだんだん大きくなって何十メートルという大木になるまでを思ってみてください。一寸1分間目を瞑^{つむ}って思ってみてください。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(瞑想中)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

大体イメージできましたかね。今、春に苗木を植えたのです。6月7月は大雨です。雨に打たれましたか。夏は暑い。セミは鳴きましたか。秋は葉が落ちる。冬は雪を

かぶり年輪がシューつと幹が縮む。イメージできましたか。鳥が飛んできました。枝にとまります。つついて巣を掘るかも知れません。人が見る。大きくなったなって。子供が登る。落ちた子はいなかったですか。いろんなことが起こるでしょう。幹がどんどん膨らんでいく。枝が伸びる。大風が吹く。葉が飛ぶ、何千枚、何万枚と飛ぶ。枝が無数に伸びる。そういうことをずっと思うんですよ。

この庭でもいいですよ。ここに植える。今は3月。8月になったら錬成会があるでしょう。大きくなったなと見るでしょう。いろんなことが関わってきます。晴れの日もあれば、雨の日もある。乾いた日もあれば、いろんな動物も来る。鳥が来る。イノシシがくる。猫がくる。いろんな人が回りに集まってくる。木の固さ、色合い、匂い、風に吹かれて出す音。いろいろありますね。

そして、その木をどこから見ているか。いつも下から見えていますか。成長するにつれてだんだん見上げるようになりますよね。時にはヘリコプターで上空から見てみる。そのようにやってみるといいと思います。

「生成発展の姿をおもう」ことによって、いろいろな自分自身や、ほかのものに対して関心を持つようになります。要するに知らん顔しない。無視せず関心をもつということは本当に大事なことです。

ある人は言うでしょう。愛情の反対は何ですか。無関心。憎しみもあるんですけど。「関心を持たないこと」とマザーテレサは言ったんですね。

それから、そのものに対して、「それはどういうことなんだろうか」と考えて理解をする。相手の立場になって自分のできることをいろいろ考えてみる。心を配る。配慮をする。そして想像力が大事。

想像力。たとえば目の見えない人が横断歩道でない所を渡ろうとしている。それを見て「あっ、渡ってるな」のところまでしか考えがいかなかったら、その次は大変なことになるかもしれないのがわからない。だからその人を見て、車がたくさん来ているんだから、本人は本人でしっかりしているつもりだろうけれども、何が起こるかわからない。それは想像力ですね。次はこうなるであろう、なるかもしれないと時間の先を想像する。

別の場所を想像することもあります。地球の裏側、アフリカはどうなっているか。アフリカは大変な所ですね。アフリカの中にも内戦が起こってなくて本当に平和な国があるんです。けれども内戦はたくさん。あるいは独裁で虐殺される国もある。大変な大陸です。一日にたくさんの子供たちが餓死します。それを想像する。関心を持つ。愛情ですね。

今回テーマになっているような、共生、共感。相手の状況がよく分かれば、自分が何とかしてあげたいという働きかけ、そのことに身を投げ出していく奉仕。こういう私たちの心の具体的なあり方に繋がっていく、展開していくものなんですね。自分のことをしっかりと考える。人のことを考える。異なった世界を思い、ものは皆どんどんと変わって発展して、生成していく。そういうものだということを思っていく。そうい

うことによって、私たちも心の力、精神の力をできるだけ養っていくことが大事になってくると思います。これが一応基本の所で考えてみたところです。

二、学ぶ力

学ぶということも私達にとって本当に大事。^{せま}狭い意味で勉強が好きだ、嫌いだというところもあるかもしれませんが、そういう意味ではありません。人間というのは学んで生きていく生き物なんですよ。「オギャー」と生まれて学ばなかったらどうなりますか。生涯「オギャー」のままにいるかも知れませんよ。我々は教育を受けて、自分でも学んで、それによって成長していく。「学ぶ力」は本当に大事。このことについて少し具体的に考えましょう。先ず第一が「ことばを学ぶ」。

①ことばを学ぶ

これは、学校の授業で言えば国語ですね。「国語の授業好きな人？」あんまりないね。「嫌いな人？」。嫌いな人の方がちょっと多いかもしれませんね。国語だけではありませんが、国語の授業というのは言葉を学ぶ授業です。ものすごく大事なのです。

当然のことですが、人間というのは一つの言語をマスターしなくてはいけない。知っていましたか。当たり前のことですね。人は一つの言語をマスターしなくてはいけない。私たちにとっては日本語です。日本語というのは素晴らしい言語だと思います。英語が大事だと言われますが、日本語が大事だということとは、大事さの次元^{じげん}が違います。一つの言語をマスターしなければ人間として現実的に生きていくのが辛いことになるのです。

その一つの言語を、日本語に代わって英語にしましょう、というような次元の話ではありませんね。英語をやっても、何語をやってもかまわないんですが、日本語をしっかり身につけるということが大事なことです。

このことはあまりにも当然なことのように、私も以前はそれほど思っはなかつたんですが、十何年前アメリカへ行った時に強烈な体験をしたことがあったんです。それはちょっとお話ししにくいようなことなんですけど、申してみます。

ある人の所を尋ねたんです。その人は日本から移住した人なんですね。20代で結婚した女性の方ですが、結婚してすぐアメリカへ行った。日本からアメリカへ行った人が英語を勉強するのに大体二通り仕方があるんですよ。一つは英語学校へ行って専門の英語の教育を基礎^{きそ}から学ぶ。もう一つは学校へは行かずに自分で何とか工夫しながらやる。それでだんだんと英語がわかって生活するわけです。

その方は自分でやる方を選んだのです。自分でやるとはいつてもなかなか頑張らないと難しいでしょう。それであまり英語が得意でない。アメリカへ来てもう30年か40年時間がたっていたんだけど、まだ英語がよくわからない。そして近くに日本人の人もいるにはいるんだけど、何せアメリカですからほとんどの言葉が英語ですからね。日本語をあまり使わなくなるでしょう。そうすると日本語もちょっと分からなくなるんですよ。英語もわからない、日本語もわからない。その方ご自身はおっしゃいませんでしたけれども、私を案内してくれた人が「この方はそれでちょっと困っているんです。」と一言、言われました。私はこれが衝撃^{しょうげき}でしたね。言葉というものがこんなにも大事なことかと初めて知ったような感じがしました。

また最近の早期教育が過度に受けとめられて、日本語を覚え始める2歳、3歳の頃から英語を教える。自ずと日本語のほうがかたくなる。それで、小学校に入って日本語がよくできず、いじめられたという報告がありました。

ですから、私たちは日本人だから日本語が当たり前で、国語の時間なんか大嫌い、と私なども思っていましたけれど、これが一番大事だったんですよ。結局一番大事なものがもうどうでもいいような、ほとんど関心がないような感じで過ごしているというのが私たちかもしれない。そうであつたら大変です。例えて言えば、断崖絶壁だんがいぜつべきの傍を歩いてごらんささいと言つたら歩けないでしょう。目隠ししたら歩けるんですよ。断崖絶壁であろうと、平均台であろうとね。そんな感じだったなと思いました。これほど大事なものを、大事だとわからずに平然と、言葉なんてどうでもいいやと、何の問題も感じずに。これは大変なことをしていたなという感じがその時強烈にしました。

それで思ったのです。人というのは、一つの言語を本当に自由自在に操れるようにマスターしないとイケないんだと。自分の思いというものも、なかなか自分の思っていることを言葉で表すのは難しいですけど、難しいからといって止めずにそれをやり抜かないとイケないんです。

人は言葉で考えるんですよ。言葉が人を作るのです。言葉を軽く見てはいけません。私たちは何かものを見る時に、大体大まかに言えば二つのもので見ます。一つが情緒じょうちよ、感情的なもの。もう一つが論理。言葉というのは情緒も言葉で表わされますが、どちらかと言えば論理の方に近い。

例えば夕焼けを見る。綺麗きれいですよ。その見た時にどう表現するか。「わあー、きれいだ」。それだけだつたらそれは情緒。それは綺麗には違いない。それは正解ではあるんだけど感情の表現ですね。「じゃあ、あなたが見ているその夕焼けはあなたにとって何であるかを言葉で表してご覧なさい」という訳です。

綺麗以上の何物でもない、言葉で言いようがないほど綺麗だと言いたいかもしれませんが、なかなかどうして、言葉はあるんですよ。私たちが言葉に強くなるには、情緒も結構けつこうですが、情緒だけで終わらずに、できるだけ言葉でしっかりものを表す。自分の心の中にあるけれども、なかなか表せないものが、もう一つどう言つたらいいのかというのがあるでしょう。そういうのはとても大事なものです。だからそれは切って捨てないように。

どう言つたらいいのかわからないモヤモヤとしたものが私とは何かというものを表すものなんです。今はわからないかもしれないけど、だんだんとそれが明瞭めいりょうになってきます。それが明瞭になれば自分というものがまた一つはつきりしてきます。取り組むのです。そうやってモヤモヤしたものをいつも持ちながら、いつかこれを言葉できちりと表してみるぞと。

私はこの頃は、自分の中にいろんな思いがあるようであっても、それをきちつとした言葉で表せないならば、それは本当の自分の思いではない、と思つてます。ちよつとこれは言い過ぎかもしれませんが、「私はこう思つているんです」というのであれば、それは言葉で表せるはず。表せないというのはまだまだ確実に自分の思いに成り

きっていないということでしょう。すなわち自分がまだはつきりしていないということ。

言葉は大事ですね。しゃべるのと書くのとどっちが好きですか。しゃべるのも大いに結構です。しかし書いてご覧なさい。一行書くのに消しゴム一個消滅しても構わない。消しては書きということをすることによって、自分というものが次第にはつきりしてくる。はつきりしてくるということが、自分が作られていくということです。

②論理を学ぶ。

ちょっと硬い表現ですが、「学ぶ」という狭い範囲で考えれば、これは学校の授業で言えば数学です。数学は論理を学ぶ。よく「数学を学んで学校を卒業して何の役に立つの」という声がありますが、私この間、数学の先生に尋ねたんです。面白いことを言われましたね。「数学の力は真実を見抜く力なんだ」と言われました。その真実を見抜く力が「論理力」。これは簡単に言えば、ものを考えていく時に、先ほどの言葉を使ってもものを考えていくわけですが、その時に、筋道をきちっと押さえて、途中で飛躍したり、関係ない方へ行ったり、誤魔化したりせずにきちっと筋を押さえて、一つ一つ考えを押し進めていくわけです。その力です。

私たちは今、民主主義の時代を生きているんですね。民主主義の反対は専制主義というか絶対主義というか、王様の権力の下に、皆が何もものが言えないような時代。そういう時代ではなくて、私たち一人一人が中心なのだという時代です。

私たちが中心の民主主義になりますと、私たちに責任がありますから、いろんなことを一人ひとりが考えなければならないことになりますね。そうすると自分の個人的なことはともかく、何をするにしても、関わっている者が皆で考える。どうしたらいいか。その時にものを言うのが論理の力。きちっと筋を押さえてずっと貫いていかなければいけないですね。堂々と話をしていかなければいけない。ですから、民主主義は数学が大事になってきます。数学というのはそもそもそういう意味があるのだということを教えてもらいました。

その時にその先生がついでながら言われましたね。「自分はある時、生徒が計算問題を解く時に、座っている姿勢が関係があるような感じがしてきた。」と言われたんです。計算問題の弱い子は姿勢が悪いと。そこで、ある時から新入生が入ってきたら先ず姿勢を見る。そうすると姿勢が悪い子は案の定、数学の成績が悪い。相関関係が見事にあるということがわかったと。そして姿勢を正しくして前傾姿勢なんですよ。勉強というのは前傾姿勢。姿勢というのが大事。これは数学の特に計算問題と大きな関連があるようです。

これは非常に具体的なことなんですが、こういうことが私たちが学んでいく時の基本的なことではないかと思えます。そういうことで、言葉と論理、内容を明確にし筋を通してきちっと押し進めていく所に、考えるということがはつきりと姿を顕わしてくる。いわゆる「考える力」ですね。

先ほど、お話ししたように、ある思いが浮かんできたとする。これを表現したい。それは、書くということによってずいぶん表現されると思えます。その時に、場合に

よっては、書いているけれども自分の思いをどうしてもピタッと表せないという時がありますね。しかし、そこであきらめずに、そういうことを繰り返していくことによって、言葉と論理というものが磨かれていって、考える力というものがだんだんついてくるのではないかと思います。どう表現したらいいのかと、ウンウン言いながら苦しむというのは非常に大切でありがたいことだと思います。充実の時でもあります。

③何でも学ぶ、何でも読む。

だんだんと君たちは、自分の専門とういうものを持つようになると思います。当然専門分野せんもんぶんやを中心に学ぶということになりますね。歴史を学んで人の生き方を学んでいきますと、私たちも、大きく言えば人類の歩みというのはその根本の所に大きな問題があるんだな。これをどうやって超えていけるんだろうか。超えていこうとした人の取り組みというのはどうだったのんだろうか。そういう、いろんな問題を知らされてきますね。

ですから、自分の専門のことをやる、と同時に一方では専門以外に「何でもやる」、「何でも読む」ということもまた大切になりますね。読むということだけではありませんが、読むということは、学ぶという行為の中心的な位置を占めるかも知れません。本を読むというのは時間もかかるし大変です。自分一人でどんどん読めればいいのですが、場合によっては仲間と一緒に読むという方法もあります。読書会のように何人か集まって読むという方法です。人と一緒に関わり合いながら読むと読みやすいということがありますね。一人で読むほうが読みやすいという人もあるかもしれませんが。私などはどちらかという、人と関わり合いながら読むと読みやすいですね。

今はある友人と読書競争どくしよきょうそうではないんですが、お互いに読んだものを報告し合う。今週は何冊読んだとかね。報告し合うほうこくのをメールでやっています。これをやると張り合いがありますね。勝った負けたまでの競争感覚はないんですけどね。彼もやってる、俺もやろうという感じになります。

一人でやると私のような怠け人間はあまり読まないような感じがします。そういう工夫をしてやるということもありますね。いろんなものを学んでいく。そして自分の専門の所を学んでいくということがあります。そういうことをやっていく中で「人間というのは一体何なのだろうか」。なかなか難しい問題みちすうですね。こういう問題の持っている難しさは、私流に言わせてもらえば、未知数が二つある問題を、一つの式で解くようなものです。

例えば、 $X + Y = 0$ とするでしょう。Xはいくつですか？ Yはいくつですか？

答えが出るでしょう。X=1だったらY=-1。X=3だったらY=-3

答えには違いないでしょう。だけど一つに限定することはできないですね。

「人間とは何ですか」と言って、「人間とはこうです」と言ってみても、それが本当に答えになるかどうかなんですよ。この難しさをこの問いは持っている。そういう所を解決かいげつしたのが仏教です。宗教と言ってもいいですけどね。「人間とは何か」というこの問いは、「人間が救われていく」、「人間が本当に充実じゅうじつして生きていく」というこ

とにおいて、そのテーマにおいて「人間とは何であるか」と出されている問いなのです。

そういう問題があるのですが、それはだんだんと考えていくとして、「人間とは何か」、そして「この世界とは何であるか」ということですね。そして一番具体的な「私自身とは何であるか」。こういう問いがどんどん出てくると思います。そうすると、こういう人間世界、私自身、これらすべての根本にあって、すべてを真に生かすもの。まさしくそれは生きる力の根源となるもの。それは一体何かという問いに展開していくとと思いますね。その「生きる力の根源」を「真実」というのです。そこで真実を求めよう、真実に出会っていこうという願いが、私たちの中から起こってくるということになります。

ものを考える一番根っこにある言葉というものをしっかり学んで自分のものにしていき、言葉を使って考えるその筋道をきちっと押さえながら、考えを推し進めていく。そしていろんなものを学んでいく。そこに、私たちの心の中で大きな問いが出てくるようになります。全ての根本にあって、すべてを生かすものは何か。自分自身の生きる根源は一体何かというような。それを「真実」というのです。

「真実」とは一体何なのか、求めてみよう、となっていく。学んでいくということから真実を求めていこうという方へ展開していくというのが私たちの学びの姿のように思います。

④真実を説いたものを読み、聞き、考える。

一口で言えば、真実を説いたものに触れるということですね。真実を説いたものが、宗教であり哲学です。宗教と言っても、宗教と名はついていても、実際に世の中には真実ではなく間違っただけのものもあります。その所は、先ほどの論理の力を大いに使って、じっくり考えてみればいいのです。それが本物かどうか。考えて全部わかるというわけではありませんが、かなり篩いにかけることはできます。

以前、君たちが生まれる頃、オウム真理教の事件がありました。知っていますか？あのオウム真理教の教祖の人はこう言ったんです。「私は空中浮遊ができます」「座ったままで空中に浮くことができる」と言ったんです。やっpegおらんさいと言ったら、いろんな条件が整わなければ出来んと、結局しなかつたんですけどね。皆さんはそれをどう思いますか。

その他、いろんなことを言って、かなりの人がそれを信じてしまったんです。空中に浮くということだけでも少しでも考えてみれば、おかしいということがわかりそうなものです。人が果たして空中に浮くだろうか。考えるまでもないことのようにですが、私たちはいろんな言葉を混ぜ合わせてあれこれ言われると、「そうかな」と思ってしまふんです。その所はしっかり考えなければいけないことのように思います。

怪しいものは見破らなければいけない。そういうような宗教もあるでしょう。それは宗教と名づけるべきものではありませんけどね。そうではなく、真実というもの、私たちの生きる根源というものを正しく明らかに説いたものがある。そういうものが本当の宗教ですね。

その一つが、私たちが学んでいる仏教の教えです。「仏」という言葉の意味は「目覚め」ということです。目覚めというのは、真実がわかるということですね。これまで真実がわからなかった自分が、ついにそれがわかるようになる。目覚めた。それを仏と言います。

何故、仏というかと言えば、元の言葉を budh、ブドゥウですね。インドの言葉です。この発音を漢字で表したのです。意味はどうか。これを明瞭にするのが難しい。一番近い意味が「目覚め」です。漢字で書けば「覚」。目覚めるという動詞です。目覚めた人という人称名詞になれば buddha、ブツダとなり、漢字では**ぶつだ**です。

従って、仏教というのは、私たちが目覚めるための教えという意味が一つありますね。それと同時に、目覚めた人が説いた教え。私たちが目覚める教えは、当然すでに目覚めた人が説いた教えでないといけない。教えを証明した人が必要ですから。それが仏教の教えです。

この仏教の教えが私たち人類の歩みの中で誕生したのは、今から 2500 年位前ですね。この 2500 年の間に仏教の歴史でいろんなことがありました。それを極大まかに見てみましょう。

一番最初めに**ぶつだ**となった人、目覚めた人、それがお釈迦様です。この方が真実に目覚め、その教えを説いた。ところが、お釈迦様が説いた教えはどんな教えなのかということは、聞いた人が、全部お釈迦様が説かれた通りにわかったというわけにはいかなかったのです。そういう所が面白い所であり問題の所なんですね。一度聞いてすぐに全部わかるような教えではないという一面があるのです。それは何故かと言えば、教えを受けとめる者の心のあり方に問題があるのです。その心の問題は、実は皆が持っている問題ですから、当時のお釈迦様の教えを聞いた人たちも、直ぐにはよく分からなかったのですね。

お釈迦様は本当は何を仰ろうとなさっていたか。それを、時代が経っていく中で、**た**尋ねていくことになったのですね。お釈迦様の真意を尋ねる歴史。それが仏教の歴史であったわけです。たくさんの方が次から次に現れて、お釈迦様の本当の意味を尋ねて来られました。お釈迦様が正しい教えを説かれたから、当然その後の人が皆それがわかるという訳ではなかったのです。わからない人が圧倒的に多かった。誤解をした人が多かったのですね。たくさんの方が本当のお心を尋ね尋ねて行かれた。この歴史を総まとめにして、「これが仏様の本当のお心なのだ」と明らかにされた方が**しんらんしょうにん** 親鸞 聖人なのです。

親鸞聖人はお釈迦様の真意を尋ね当てた。これが今から約 800 年位前のことです。鎌倉時代ですね。尋ね当てた方が日本のお方であったということが大変な大きな因縁となって、日本という国は本当に仏教が盛んになり、次々と伝えられていく国になりました。私たちが日本に生まれて、仏教の教えに出会いやすくなったという一面は大いにあるでしょう。

そして、今私たちがこうして仏教の教えを聞くことができるということは、住岡夜晃という方が大きな因縁になっています。住岡夜晃先生は 120 年位前に生まれて、60 年位前に亡くなられましたから、親鸞^{しんらんしやうにん}聖人から 700 年位たっている方ですね。この方が、私たちが親鸞聖人やお釈迦様の真意を明らかにした教えを聞いていく場を具体的に作って下さったのです。直接私たちの聞法^{もんぽう}の場を作って下さった。聞法というのは、仏法を聞くということであり、仏様の願いを聞くということですね。阿弥陀仏の本願を聞くということであり、お釈迦様の本当のお心を聞くということでもあります。

住岡夜晃先生がお亡くなりになって 30 年ほどたってこの J B A セミナーができ、今に至っているのです。私たちの心の底の願い、私たちの一番根本にあって、「すべての私たちが真に生かすものは何か」「真実なるものは一体何か」。そのことを一番最初にお釈迦様が明らかになさって、教えを説かれた。その教えは一体どんな教えなんだろうかと、と無数の人々が長い時間をかけていろいろ考えて、ついにお釈迦様の教えはこうなんですよと、親鸞聖人が明らかにされました。その仏教に名前をつけて「浄土真宗」と言います。

具体的なこういう場でこの教えを聞いていく。真実を説いた教え、仏教の教え、浄土真宗の教えを聞いて、考えて、さらに教えの通りに歩いていく。こういうことが本当に大事になってきます。このようなことを学んでいく力が大切です。

もんぽう ひっしゅうか もく 聞法は人生の必修科目

人間として本当に学んでいかななくてはいけないもの、それは仏法です。仏法を聞くのが聞法ですね。私たちが学ぶべきものは、自分の専門のことをはじめ何でも学んでいく。それはもちろん。しかしそれだけではなく、一番の根底として聞法することが大事。これが私たちが広い意味で言う「学ぶ」ということの中身、聞法を一番根底に据えることです。人間存在には、学ぶべきものとしてこれ程にも大事なものがあるのです。

三、独立する力

独立と言え、当然^{ひと}独り立ちするわけで、JBA^{さんか}讃歌にもあるように「今、^{ひと}独り立ちの時」当然意味はわかることだと思いますが、いろいろ考えてみましょうね。

①根源に出会う。

根源とは、「根」はそれ以上進めずに立ち止まることをいいます。「源」は巖の間から水か滴り落ちることで、川の源です。「根源」、まさしく根本のことですね。「根」は樹木のイメージで表していますね。根の先端が盤根錯節と言って、根と節がもつれ合っている状態です。その状態でしっかりと樹を支えているのです。

詩集を見ていますと独立に関する詩が多いようです。独立したい思いに駆られるとき、その世界を詠いたくなる気持は分る感じがしますね。

そこで詩をいくつか見てみようと思います。

『人間に与えるうた』山村暮鳥（大正時代の人）

そこに太い根がある これを忘れてはいけけないのだ
腕^{うで}のような枝をひっさき 葉っぱをけちらし
頑丈^{がんじょう}な幹^{みき}をへし曲げるような大風の時ですら
真っ暗な地べたの下で グッと踏ん張^ふっている根があると思えば
何でもないのだ それでいいのだ
そこにこの壮麗^{そうれい}が 樹木を見ろ 大木を見ろ
このどっしりとしたところはどうだ

こういう詩です。一番根本に根を張って「真っ暗な地べたの下で グッと踏ん張^ふっている根があると思えば何でもないのだ」と言うんですね。上はどんなに風に吹かれて枝が折れ、葉っぱが吹き飛んでも大丈夫だという、こういう詩です。

本当に私たちは、「根」を忘れてはいけません。「根」は見えないですよ。「真っ暗な地べたの下」ですからね。「地べた」という表現も面白いですね。普通だったら地面とか大地とかでしようが、「地べた」ですから、皆が踏みつけるような所の真っ暗なその下に、その樹を支える本当の力の元があるんですよ。我々は上に出ている所だけを構^{かま}っているいろいろ飾るでしょうけど。そういう根源に出会うということ。

ここに、「出会う」と書いたんですけど、自分という人間を本当に独立させて、独立者として支えるものは、自分を超えた大きなものです。自分を超えた大きなものと、私との関わり合いの問題になるのですね。

ですから、初めに根源を「持つ」でどうかなと思ったんですが、ここは厳密^{げんみつ}に言って、私たちは自分を超えたものに対しては、それに「出会う」と言うべきでしょうね。「私を超えたものに出会う」出会ったものは私よりも大きなものですから、その大きなものに対して、私はどういう態度をとるか。分かりやすく言えば「頭を下げる」ということです。

頭を下げて、その大きなものをどうするのか。^{ちようだい}頂戴するのはです。大きなものに頭を下げて、私の頭の「頂 (いただき)」のところで「戴 (いただ)」くのです。頂戴することによって自分のものになるんですね。出会い、頭を下げ、頂戴する。こう3つ挙げますと、これが本当に私を超えたもの、そして私を独立させるもの、大きな力に対する私たちの取るべき^{たいど}態度ですね。

それでは、これに対して取ってはいけない間違っただ態度はどうか。それは、私を超えた大きな根源であるにもかかわらず、これを小さな自分が考えて、自分で作り上げてしまうということです。「これが私を超えた根源のものなのだ」と自分で考えて決めてしまう。自分で考えること自体は大事なことです、私を超えたものだけは自分で考えられない。だから、考えて、考えて、それでも考え当てることができない根源のものが、最後はそのものの方から私の所へやって来て下さる。

それを「出会い」というのです。私が考えて作り出すものではありません。そして出会ってこれに対して頭を下げるのが本来の姿なのですが、その逆に、相手を見下ろす。私を超えたものを、自分が見下ろす。こんなことはあり得ないこと、あってはならないことです。私がすべきことは頭を下げることです。これによって初めて根源なるものを頂戴できる。出会うことができるのです。頂戴することの逆はまた^{つか}掴み取るような感じでしょうか。自分が手を伸ばして^{つか}掴み取って食べるような感じ。自分の欲の手で握ったものは、全て本来の力を失っています。

根源なるもの、それがまさしく真実なるものですね。その真実なるものに、私たちは仏教の教えを聞いて、聞いて歩いて、ついに会える時が来る。それが、私が独立できる一番の理由、^{こんきよ}根拠になるものなのです。

そこで実際の生き方ですが、独立して生きると言えば、もうそれだけで分かるような感じがしますけれど、もう少し考えて見ましょう。

②「これが私です」と自分で名のって生きる。

こういう場面を考えてみましょう。自己紹介をする時に、時々^{た ことしやうかい とわり}「他己紹介」、隣の人自分が自分を紹介をするというやり方がありますね。その場面で考えてみますと、隣の人が自分のことを知ってくれている場合は、この人はこういう人なんですと言われて、自分はそれを聞いてニコニコ笑っておられるかも知れません。自分と合っていればいいですが、違っていれば、「そうじゃない、私はこうなんです」と言わないといけないということです。

これは例えばの話ですけどね。いろんな人がいろんな形で自分のことを言ってくれるということがあるんです。それは自分と合っているようなものもあるけれど、たとえ合っていても「自分という人間はこういうことを考えて、こういう^{かだい}課題を持って、これを明らかにしようと生きているのがこの私なんです」と、そこをはっきり出していく。どんどん言うというのではないんですよ。自分自身でそれをはっきり持っている、そういう意味合いです。「これが私です」と^{なの}名告って生きるということです。

明日、親鸞聖人のご生涯のお話をしようと思っておりますが、親鸞聖人という方が一生涯そのような生き方をなさったのです。「親鸞」という名前。これは親鸞聖人が、ご

自分でつけられたお名前です。名前が子どもの頃から何回か変わっていますが、この名前は、自分で考えて自分で名告られたのです。いつの頃からかは明確ではありません。私は33才の頃だと思っていますが、まだはつきりとはしません。

どういう意味があつて「親鸞」と名のられたのか。そこが親鸞聖人が持たれた仏教上の大きな課題と直結しているところです。先ほどのお釈迦さまが説かれた教えの真意は何なのかということに関わることな^{かか}のです。その問題を自分は明らかにするのだという課題を、親鸞聖人は自分で担^{かか}っていかれるのです。その課題を担^{かか}って生きるという意志の表現が「親鸞」というこの言葉なのです。ご自分の名前でもあるし、自分の課題を表すことばでもあるのです。親鸞聖人は、30歳代から90歳まで、「親鸞」という課題、問題を荷^か負^ぶして生きられました。生まれて生きる私たちの人生には、大変な問題があつて、その問題の根本の解決を私は担^{かか}って生きるのだという決意と覚悟の現れです。大変な方ですよ親鸞聖人は。

これについても面白い詩があります。有名な詩です。

『表札』石垣りん

自分の住むところには 自分で表札を出すにかぎる
自分の寝泊りする場所に他人がかけてくれる表札は
いつもろくなことはない
病院へ入院したら 病室の名札には石垣りん様と様がついた
旅館に泊まっても部屋の外に名前は出ないが
やがて焼き場の窯^{かま}に入れば 閉じた扉^{とびら}の上に石垣りん殿^{どの}と札が下がるだろう
その時私が拒めるか
様も殿もついてはいけない
自分の住むところには 自分の手で表札を掛けるにかぎる
精神のあり場所も はたから表札を掛けられてはならない
石垣りん
それでよい

「精神のあり場所も はたから表札を掛けられてはならない」とね。「私はこの問題意識のもとに私^{きょうれつ}という人間を生きているんです」ということをはつきりさせているのです。そういう強^{きょうれつ}烈な独立者の姿ですね。

③私自身を全力で生きる。

もし逆に、自分自身を全力で生きることができないとすれば、自分がイヤなのかもしれない。イヤな自分を全力で生きるということはできないでしょうね。自分のことがイヤということは、自分を自分で受け止められない。他の自分であればよかったということでしょう。

私も小さな頃は言っていました。覚えていますよ。友達の家遊びに行ったら我が家にはない物があるんです。それで家に帰ってどう言うか「あの家の子供になればよかった」自分を受け止めるのは子供の頃はなかなか大変。大人になっても大変ですね。

しかし、結局私たちは、独立して生きていこうとすれば、自分自身を受け止めていくというのが大きな問題ですね。ここがキーポイントですよ。仏教の教え、浄土真宗の教えというのも、「自分を受け止める」ということに関する教えがたっぷりあります。自分を受け止めることができれば、そこで初めて全力が出せる。次のような詩があります。

『われはくさなり』 高見順

われは草なり のびんとす のびられるとき のびんとす
のびられぬひは のびぬなり のびられる日は のびるなり
われは草なり みどりなり 全身すべて みどりなり
まいとしかわらず みどりなり みどりのおのれに あきぬなり
われは草なり みどりなり みどりのふかきを願うなり
ああ 生きる日の美しき ああ 生きる日の楽しさよ
われは草なり 生きんとす 草のいのちを生きんとす

これは実にいい詩ですね。全身すべて緑なんですね。だから緑であることの自分をこの草は受け入れたのです。「毎年変わらず緑なり」これが自分なんだと。「緑の己おのれにあ厭きぬなり」あ厭きない。そして何を願うかと言えば「緑の深きを願うなり」、いよいよ自分がこの自分になっていくのだと。そのように、本当に自分を受け止めることができる時に、初めて人は力が出ます。この辺が私たちの問題ですね。受け止めることができるかどうか。

もし自分に力がなければ、全力が出せずに、人に依存いぞんしたりします。独立と依存は反対の概念がいねんですね。依存するということは私たちにとって強烈なマイナスのイメージを持ってます。依存したくないと思っているんですよ、心の奥の深い所で。試しに「あなたは何かいぞんに依存してるじゃないの」と言われたら腹が立つでしょう。依存したくないと思っているんですね。しかし、それでも何かいぞんに依存していこうとする。次の詩は茨城のりこさんが生涯の最期あたりで書いたものです。

『よりかからず』 茨城のりこ

もはや出来合いの思想にはよりかかりたくない
もはや出来合いの宗教にはよりかかりたくない
もはや出来合いの学問にはよりかかりたくない
もはやいかなる権威にもよりかかりたくはない
長く生きて心底学んだのはそれぐらい

自分の耳目 自分の二本足のみで立っていて
何不都合のことやある
よりかかるとすれば それは椅子の背もたれだけ

さて、もう一つ独立ということが持っている具体的な姿についてです。

④人を利用しない。利用されない。人を制圧しない。制圧されない。

制圧や抑圧^{よくあつ}というのは何らかの力でもって人を押さえつけることです。その人をその人として尊敬^{そんけい}し、自分も人から抑圧されない。そして責任を持つという問題がありますね。これも独立ということにとっては重大な概念^{がいねん}だと思います。

『一個の人間』 武者小路実篤（白樺派）

自分は人間でありたい 誰にも利用されない
誰にも頭を下げない 一個の人間でありたい
他人を利用したり 他人をいびつにしたりしない
その変わり自分も歪^{ひずみ}にされない 一個の人間でありたい
自分の最も深い泉から 最も新鮮な命をくみ取る
一個の人間でありたい
誰もが見て これでこそ人間だと思ふ
一個の人間でありたい
一個の人間は 一個の人間でいいのではないか

本当に根源に立ち返ること。根源に帰るとか、根源なるものを持つと言いますが、そのこの所が具体的に大きな問題であって、それが「根源に出会う」という問題。「出会う」というのは自分の方から行って出会う面もありますが、向こうの方が私の所に来て下さって出会う、そういう出会い方。そのあたりになるとなかなかデリケートな所があって、「向こうから来て出会う」と一言で言えそうな感じもしますが、実はそこは広く深い世界があるのです。

根源なるものと私が出会う出会い方は、いざその場面になると大変な内容があります。そこを緻密に押さえ確認して明らかにしていかなければいけません。出会いの世界を丁寧に紐解(ひもと)くことが大事です。それは人間にとってとても大切なことなのです。そういうことを含めて「教えを聞く」というのです。そういう内容は、普段の私たちの世間の場所ではまずないような情報なのですよ。

しかし、私たちが本当に真実なるもの、根源なるものに出会う。それが仏様に出会うということですから、そのことを説く教えは豊富にあります。その教えを聞いていくのですよ。それは君たち、今からたっぷり時間をかけて、じっくり聞いていって、どんどん大きな大木になっていって貰^{もら}いたいと思います。以上が3番目の「独立する力」についてですね。

四、人のために尽くす力

これを最後に考えなければならぬと思います。本当の独立者は、人のために力を使って生きる。自分のためだけに生きるということはありません。自分が他の人に何かをすることによってその人が喜ぶとすべしでしょう。その喜んだその姿を見るとこちらが嬉しい。人に喜んでもらいたい。これが人間です。このことはものすごく大事なことのようによ思います。

私自身は、性格の面から言えば、人に喜んでもらうことをするときには何の抵抗もなく、からだ自体が「どどんやれっ」と言っているような感じがします。喜んでもらうのが自分の喜びなんです。おそらく皆さうでしょうね。

特に子供の頃からのことを思い返してみても、この性格はどこから来たんだろうと考えてみると、どうも母親からのような感じがします。私の母親は子供の私が見ていて、人に喜んでもらうのが本当に嬉しかったんですね。だからサービスするのが好きで、何でも持って行きなさいという感じでした。

私の家の前は小学校だったんです。朝、チャイムが鳴ったら家を出るんです。鳴り終わるまでに教室についている。学校の授業が終わったら毎日のように野球をします。夏なんか暑い。途中で、みんな「喉が渴いた、行けーっ」と言って我が家の玄関先に来るんです。うちに井戸があつて美味しく冷たい水が出ていた。それを母親がバケツにいっぱい汲んで、柄杓を何本も置いてね、そういうことをするのが大好きだったんです。それを皆知ってるもんだから「早く行け、早く行け」と言ってるんですね。母親の性格がさうだった。それを受け継いでいるのではないかなと自分では思っています。

だから、「お前、人生で何をするか」と問われると、若い頃ならともかく、もう私も人生の何割かが経ちました、7割方過ぎているでしょう。そうすると何をするかとなれば、だんだん絞られてきますね。もう自分のことは少々のことはいい。何とか人に喜んで貰いたい。その喜んでもらうのもいろんな喜びがありますから、一番大事なことで喜んでもらいたいという思いがあります。

人のために尽くすということによ基本的なことを押さえれば、「優しい」ということが大事。日本を代表する哲学者とせば西田幾多郎でしょう。西田幾多郎さんが言っていました。人間は考えるだけではダメだ。優しさがないとダメなんだとね。哲学は、優しさがないとダメなんだと。それでもう一つ詩を讀んでみます。

『夕焼け』 吉野弘

いつものことだが電車は満員だった
そしていつものことだが若者と娘が腰を下ろし
年寄りが立っていた
うつむいた娘が立って年寄りに席を譲った
そそくさと年寄りは座った

礼も言わずに年寄り
は次の駅で降りた
娘は座った
別の年寄りが娘の前に横あいから押されてきた
娘はうつむいた、しかし、また立って席をその年寄りに譲った
年寄りは次の駅で礼を言って降りた 娘は座った
二度あることはと言う通り 別の年寄りが娘の前に押し出された
かわいそうに娘はうつむいて
そして今度は席を立たなかった
次の駅も次の駅も 下唇をギュッと噛んで体を強張らせて
僕は電車を降りた
硬くなってうつむいて娘はどこまで行ったらう
優しい心の持ち主はいつでも我にもあらず受難者となる
なぜって 優しい心の持ち主は
他人の辛さを自分の辛さのように感じるから
優しい心に責められながら 娘はどこまで生きるだろう
下唇を噛んで 辛い気持で 美しい夕焼けも見ないで

という詩なんですね。優しさには受難が待っている。人の為にしても、人のためにしたからといって、全てが「いいことをしたね」と思われないんです。逆に「何をするか」ということにもなる。大変なんですね。大変であるからこそ、人のために尽くす力が大事なんです。ただ「そうか」と言って人の為になんかすればいいのかというものではないんです。その力がどこからくるのか。それが独立する力でもあるのです。

すなわち、「根源の真実に出会うということ」。その根源の真実が私たちに独立させ、私たちに優しさを生みだす。この力はどんな受難にあっても大丈夫なんです。そういう優しさを発揮できるようなそういう人になりたいと思います。その力に出会いたいと思いますね。その力に出会っていく道というのが仏教の道なのです。

五、親鸞聖人と生きる力

親鸞聖人という人の一生の歩みを見て、これら四つの力を親鸞聖人はどのように発揮して一生涯を歩まれたか。そういう視点で少し考えてみたいと思います。

仏教の歴史を簡単に見てみますと、先ほども少し触れましたが、先ず最初にお釈迦さまが現れまして、この方が初めて真実なるものに目覚められた。そこでその真実に誰もが出会っていく道を説かれたのです。それが仏教の教えですね。

「お釈迦さまが真実に目覚め、その教えを説いた」この教えが「経典」。こういうことが、私たちの人類の歴史の中で起こったのです。このことがあったから、私たちはこの教えを学んで、お釈迦さまと同じように、「本当によかった」と言える生涯を生きることができるのです。

お釈迦さまの後は、ずっとこの「経典」が伝えられていくということなのですが、しかし、そう簡単にはいかなかったのです。仏教の歴史というのは悪戦苦闘あくせんくとうの歴史です。「お釈迦様が説かれた教えの真意は何か」、こういう問いが次々と出された。ということはその教えが、みんなに素直に受け入れられなかったのです。

「お釈迦様の教えの真意は何だろうか」ということを尋ねていく道がずっと続きました。たくさんの方が尋ね求めていきました。その中には間違っまちがてて教えを理解してしまった人もあれば、正しく教えを理解した人もあります。

そして、ざっと 1700 年位たった頃、親鸞という人が現れました。親鸞聖人は、お釈迦さまの教えの真意をついに尋ね当てたのです。じつは親鸞以前に真意を尋ね当てた人が何人もいた。その方たちの教えを親鸞聖人も学んで、さらにご自分で考えをお進おめて、ついに「お釈迦様の本当のお心はこうなのだ」ということを尋ね当て、それを表明されました。

親鸞聖人の、人類の歴史の上で占める役割は大変大きなものがあります。お釈迦様が現れたけれども、もしその後に親鸞という人が現れなかったなら、後の私たちに正しい教えが伝わっているかどうかは甚はなはだ疑問です。それほど大きなお仕事をなさったのですね。この方はその生涯をどのように生きられたのか。生きる力は何だったのか。このことを少し見てみようと思います。

それからもう一人、親鸞聖人からさらに 700 年位後に、ここに写真があります住岡夜晃先生という方が現れたのですね。この方が真宗光明団という聞法もんぽうの場を作って下さいました。お釈迦様や親鸞聖人の教えを、皆が聞いて歩いていくことができる道場です。そのような具体的な場がありますから、私たちは教えを聞くことができます。何でも具体的な場があるんですね。

親鸞聖人の生涯しょうがいは 90 年だったのですが、住岡夜晃先生は 54 歳という短い生涯でした。しかし、この方が現れて、その道場にお年寄りも若い人も子供も男も女いろいろな人が集まって、お釈迦様や親鸞聖人の本当のお心を伝える教えを聞いていったのですね。その後、住岡夜晃先生が亡くなられて 30 年ほど経たって、この J B A セミナーが生まれました。そしてさらにまた 30 年たったというわけなんです。

そういうわけで、30年目の今回のJBAセミナーも、直接的には住岡夜晃先生、さらに800年前の親鸞聖人、さらには2500年前のお釈迦さまにつながっているのですね。本当に大事なことを私たちはお聞きし、大事な会が開かれてそれに参加しているということになります。

親鸞聖人の生涯

さて、親鸞聖人の90年のご生涯です。人が「生きる力」、それを4つに焦点を絞って、それらを親鸞聖人はご生涯にわたって具体的にどのように獲得し、どのようにその力を発揮して生きていかれたかという所を見ていきたいと思えます。

はじめに、親鸞聖人という方のご一生の全体の流れを見ておきましょう。誕生は西暦で1173年、鎌倉時代ですね。平清盛が亡くなった年でもあるのです。4才の時に父親と別れる。お父さんは日野有範と言って身分は下級のお方なのですが、親鸞聖人が4才の時に、どういう事情があったかわかりませんが、姿を隠され再び会うことはなかったと言われます。そして、8才の時にお母さんが亡くなります。

聖人は、8才でお父さんもお母さんもいなくなりました。そして9才で出家得度。お坊さんになるわけですね。その当時に日本を代表する仏教の教育機関と言え、それは比叡山の天台宗の道場だったのです。

9才から29才までの20年間、比叡山の道場で勉強し修業しその道場での仕事をし、自ら真実を求めていくということをやさいます。9才から29才ですから、今ここにいる人はかなり網羅されていますね。若くて元気で、力も溢れ、頭も冴えて情熱もいっぱいあって、親鸞聖人という方は体格もがっしりとして大きな人だったようですから、大男が頑張って修業して仕事して「真実とは何だろうか」、「人間が救われる道はなんだろうか」と、この20年間一生懸命やったのです。そういう20年を送りました。しかしそれでもなお、道が見つからなかったのです。

29才の時に、六角堂参籠をされました。京都の街に六角堂というお寺があって、そこに参って、100日間籠るのです。それまでの20年間の歩みとは一体何だったのか、なぜ20年間も頑張って真実の道が見つからないのか、これから何をなせばいいのか。そういうようなことを考えられたのでしょうか。

このお寺は、聖徳太子方が建立されたと伝えられています。聖徳太子という人は、日本の仏教の父と言われているほどの人。初めて日本に仏教を導き入れて、ご自分でも経典を学んで、経典についての本も書いているという方ですね。その聖徳太子が作られたお寺。そこで100日間考えて結論を出そうとしたのです。

そして95日目の明け方、夢を見るのです。夢の中に聖徳太子が現れて、いろいろなことを仰るのですが、結局「法然上人のもとへ行け」という結論を親鸞聖人は得る。これによって法然上人のもとへ行かれます。

法然上人というお方は、親鸞聖人よりも40歳年上ですね。この時親鸞聖人は29才、法然上人は69才ということになります。かなりの高齢です。法然上人も親鸞聖人と同じように、以前は比叡山で学ばれていた人です。しかしこの方もやはり道が見つか

らなかった。43歳の頃「南無阿弥陀仏」によって救われるのだということが明らかになります。

これは昨日から申し上げている、私たちが独立者として立つその根源となるものです。仏様の願いです。「南無阿弥陀仏」こそ私たちにとって一番大事なものであり、お釈迦様が私たちすべての者に「南無阿弥陀仏と念仏申せ」、「そこに人間の本当の救いがあるんだよ」と説かれていたのだということを明らかにすることができたのです。

その後京都の街中で法然上人は念仏道場を開かれた。そこへ親鸞聖人は行き、29才から35才まで法然先生からたつぷりと教えを聞くのです。法然上人が念仏の教えを説かれ、300人とか400人という人が集まって聞いていたと言われています。

親鸞35歳の時に法然上人の教団が弾圧されるという事件が起きます。比叡山や他の仏教の人たちが、念仏の教えを批判する。それを、時の政府が受け入れて法然の教団を弾圧するわけですね。解散させられます。中心人物が4人ほど死刑になります。8人くらいの方が流罪になります。親鸞聖人も越後（新潟県）に流罪になります。一番中心の法然上人は土佐（高知県）に流罪になります。実際は香川県辺りで許されたのですけどね。承元の法難と言います。

親鸞聖人は流罪になりまして、42歳の頃まで越後で生活をする。京都は都会ですけど、こういう所は本当に田舎。大変な苦しい生活を聖人はなされた。その途中で法然上人が亡くなります。親鸞聖人は35歳で法然上人と別れ別れになって、それきりもう会うことはなかったのです。

42歳まで越後におられまして、その後、関東へ移住されます。今の茨城県を中心に栃木県、千葉県辺りで活動され、関東の地でたくさんの人々に教えを説かれます。62歳の頃に元住んでいた京都へ帰られます。そして亡くなるのが90歳。概略を言えばこのような生涯です。

幼い時に両親に別れて9歳で出家をして、29歳まで比叡山で修業をし、法然上人の所へ行って6年間教えを聞き、法然上人の教団が解散させられて、越後へ流罪になる。越後に7年間ほど居て関東へ移って約20年間人々を教化し、そして京都へ帰られて30年近くおられて亡くなる。これが聖人のご一生ですね。

親鸞聖人と「学ぶ力」

4つの「生きる力」というものが、親鸞聖人においては具体的にどうだったのかを見てみたいと思いますが、先ず2番目の「学ぶ力」というのを見てみましょう。

聖人は、9歳から29歳までの20年間、大変に学ばれたということが想像されます。聖人はすでに出家以前の9歳までの間に、子供ではありますが、それなりにかなり書物を読む力を持っていた。そういう教育を受けていたとも言われています。この20年間は相当な勉強をなされたであろうと思われます。ただ、その勉強の中心が比叡山での勉強ですから、先ほどの「お釈迦さまの教えの真意は何なのか」といろいろな人が尋ねていったのですが、必ずしも正解ではないような教えが比叡山の中にはたくさんあったのです。

しかし、何が正解なのか、何が正しいのかはなかなかわかりません。そういう中で親鸞聖人もそれらをどんどん学んでいかれた、ということは想像できますね。

その後、六角堂の参籠を経て、法然上人のもとへ行かれます。ここが6年間ですね。ここでは法然上人によって明らかにされたお釈迦さまの本当のお心、すなわち「念仏申す」ということ。仏様の願いを頂いて、仏様の力に目覚めて生きていく、その念仏の教え、これを中心にして学んでいかれる時なのです。

29歳から法然上人の教えを聞いていった。特に最初の100日間は、何があろうと教えを聞きに行ったと言われます。雨が降ってもどんな天気であっても、どんな大事件があろうとも行ったと言われます。

恐らく季節は4月から7月頃です。春から梅雨、そして夏の時期です。六角堂参籠を終えたのが4月の初め頃ですからちょうど今頃ですね。今頃から7月の中頃まで、連続100日間。想像してみてください。ただ真実の教えが聞きたいという心の底からの願いに促されて聞き続けたのです。

お釈迦様の説かれた経典に始まり、お釈迦様の真意を言い当てたその後の人たちの教え、法然上人ご自身のお考え、それらを法然上人は、どんどん説いて教えてくれる。親鸞聖人は夢中だったでしょう。時よ終わってくれるな、真実が私の前に現われるまで時よ続いてくれという思いだったかもしれません。

渾身の力を注いで、親鸞聖人は聞き学び考えられたでしょう。生涯で最も学び考え、願いを起し時間を大切にしたい闘いの時であったと思います。自分でも経典や多くの書籍を手に入れ、読み、写し、要約して記録し、法然上人に尋ね、仲間と議論をし、寝る時間を惜しんで考える。そういう猛烈に道を求める火のような毎日が続いたであろうと思われま

す。35歳で流罪になったその地においても、様々な文献、書物を持って越後へ行ったのであろうとも言われます。じつは越後におじさんがいたのです。親鸞聖人が越後に流される少し前に、おじさんがその地の監督者に任ぜられて行っていた。ですから親鸞聖人を待つような感じだったかもしれません。

42歳頃関東へ行きますが、そこでも勉強は続き、52歳さらには55歳、この辺りから、お釈迦さまが教えを説かれた真意は何なのかについて、真正面から解き明かし書き表していこうと、書物を書き始められます。

この時期は猛然と勉強されたでしょうね。ただ、以前の若い時の様な試行錯誤の勉強ではない。中心点が既に明らかになっている。それを睨みながら何度も読み込んで、真実とは何であり、真実に出会う道はどのようなものを体系づける作業をなさったのです。

この営みはずっと続きます。少なくとも76才頃までは。もっと続いたであろうとも言われます。結局少なくとも25年間をかけて書かれたこととなります。その書籍が『教行信証』なのです。ざっと300ページ位の本で、すべて漢文です。

さらに90歳で亡くなられる前、88歳頃までは何らかのものを書かれています。生涯にわたって様々な書物を書かれました。聖人は一生懸命勉強、学び抜かれたのですね。

学び抜かれたということは、ただ勉強したというような平面的なことにも受け取られるでしょうけれども、大切なことは学んだ内容です。

誕生 1173 年

4 歳 父と別れる

8 歳 母と死別

9 歳 出家、得度

↓ 比叡山の道場で====>書物を読む力を持っていた

29 歳 六角堂参籠・法然上人のもとへ

(今までの歩みは何だったのか。なぜ真実が見つからなかったのか、)

100 日間はどんな事があっても教えを聞きに行った。

六角堂で聖徳太子の夢をみる「法然上人のもとへ行け」

法然上人の念仏の教えを聞き、学んでいかれる。

↓ 仏様の力を頂いて生きていく。

35 歳 法然上人の教団が弾圧・解散され、流罪の身となる (承元の法難)

↓

42 歳 関東へ移住 (沢山の人に教えを説かれる)

↓

62 歳 京都へ帰る

↓

90 歳 一生涯学びぬかれた。

先ほどのお釈迦様、そしてお釈迦様の後の親鸞に至るまでの千何百年の間にたくさんの方が現れました。その中に誤った仏教理解もあったのです。間違っあやまて教えを受けとめた人もたくさんあった。正しく教えを受け止めた人もあったのです。教えに出会って、その正しさがわかるというのは、じつは物凄ものすごく難むづかしいことだったのです。この辺の所が、仏教の教えを理解する一つのポイントでしょうね。正しいものであれば誰もすぐにそれは正しいとわかるはずではないか、と普通は思うでしょう。いや、実際はなかなかそうはいかないのです。

そういうわけで、仏教の歴史は大混乱だいこんらんしました。その中で、お釈迦様の本当のお心はここにあるのだとあって、正しく教えを説いた、そういう人たちが何人も現れました。その中から、親鸞聖人は七人の高僧こうそうの教えに出会って、その教えを大事に学ばれた。その時の聖人の言葉が「遇あい難がたき教あえに遇あい、聞あき難がたき教あえを聞あくことができま

した」という表現をされるのです。本当に実感がこもっています。七高僧の方々の一番親鸞聖人に近い7番目の方が法然上人です。この方に実際に出会って、6年間たっぷりと教えをお聞きしました。それがまさしく「正しい教え」。正しい教えにはなかなか出会うことができない。自分自身の教えを見る目というものがまだ出来ていないと言うべきでしょうか。それがついにであ出遇うことができた。

「学ぶ」というのは、ただ次から次に学ばばいいというものでもないのです。学んでいるその内容には、奥行きがある。もっと奥へ、さらに奥へ、扉を開いていく。開き難い扉があるんですよ。しかしその先には大事なものがある。それを尋ね求めようと、もっと奥に開き、さらに深く開いて、という学び方。その力ですね。親鸞聖人においては、どんなことがあっても真実に出会いたい、真実を明らかにしたいという願いがそうさせたのでしょね。どんどん深く、真実に向けて深く、という学び方をしたのです。私たちの学び方もそうあるべきだと思います。

いろいろなものを学びます。君たちはやがて自分の専門分野のことをしっかり学んでいくことになると思います。しかし、一番根本は「聞法」だと言いましたね。「聞法は人生の必修科目」だと言いました。聞法は真実に向けて、より深く学びぬいていくことです。

教えの扉を開いていくということは、自己自身を深く開いていくということです。親鸞聖人は、ご生涯にあつて、この学ぶ力を遺憾なく発揮されたお方だったと思います。

親鸞聖人と「独立する力」

はじめに2番目の親鸞聖人の「学ぶ力」を見てまいりました。1番目はちょっと後回しにして、次に3番目の「独立する力」を見てみましょう。

親鸞聖人は、法然上人にお会いして、念仏の教え、仏様の説かれた教えをお聞きしていく中で、これまでわからなかったこと、比叡山の20年間の教えではよくわからなかったことがどんどん分かってきたのでしょね。

教えを正しく受けとめるか、間違ってしまうかの「カギ」がわかったと言うべきでしょうか。一番のポイントですね。それを言葉で表すと「回向」ということになるでしょう。この言葉は知っておいてもらうといいと思います。少し分かりにくいかもしれませんが、私たちが生涯課題にしていくべきことですから。

昨日、私たちが独立して生きることが出来る一番の根源ということを行いましたね。私たちを下から支えて、この人生を「本当に良かった」と言えるように生きさせる真実の力。真実なるものが私たちを支える根源であつて、真実との関わり合い方を申しました。

その時に、「真実に会おう」と言いました。もし会おうということがなければ、自分で考えつくとか、あるいは自分で作るとか、そういうことになるでしょう。しかし、自分を支える根源を、自分で考えついたり、自分で作ったりすることができますか。人は何でも作りますから、できそうな感じがしますが、これだけはできないでしょう。

私を支えるもの、それは私を超えたものでなければなりません。私と同じような同列のものであれば、どちらも迷ってどうしていいか分からない者同士ですから、相手を支えることはできませんね。では、私を超えたものとどのようにして触れることができるのか。両者の正しい関わり合い方は、「会おう」ということなのです。

もちろん自分のほうからも「真実とは何だろうか」、「私を支える根源とは何だろうか」と尋ね、これを明らかにすることを願い求めていくのですが、じつは、真実それ

自体もまた私たちの所に来ようとしている。このことはとても大事なことです。即ち、両者がお互い相手の方へ近づいて出会うようなものです。

と言っても、私だけが真実に向かって動いていくだけであれば、出会うことはできません。なぜなら、私たちは真実そのものも、その方向も知らないからです。歩みは五里霧中の歩みにならざるをえません。しかし、それが大事。それでも歩むことが大事。真実を願い求める自分となることが大事なのです。そのように歩む私に向かって、真実は来てくださり、そしてそれによってはじめて両者が出会うことができるのです。真実を求めない者のところには真実は現れません。じつは現れているのですが、真実と気づくことができないのです。願心を持つことの大切さがここに 있습니다。

真実が来てくださって出会うのですから、その出会いは自分が相手を掴み取るようなものではなく、頭を下げて頂戴するものです。私を支える真実は私が深々と頭を下げて頂戴すべきものなのです。親鸞聖人はこのことがわかったのです。

このように「回向」というのは、真実なるものが私の方に来てくださること。真実の方から言えば、「あなたの根源になりましょう」と言って私のところへ行こうとする。真実が私のところへやって来るその動き、これを「回向」というのです。これが「出会う」ということですね。聖人は、比叡山の20年間ではそのことがわからなかったのです。そのことが身の上に起こらなかったのです。

比叡山では、沢山の僧侶たちがいろいろな仕事をし、修業をし、勉強していたんですけど、恐らく「回向」ということは中心の問題にはなっていなかったでしょうね。親鸞聖人もわからなかった。法然上人の所へ行って、念仏の教えを聞いて、まさしく法然上人の教えが、「回向」を説く教えだったのです。「あなたの根源となる真実の仏様が、『あなたを支え、あなたが本当に良かったと言える人生を歩ませよう』とやって来ている。」そういう教えを親鸞聖人は聞いて、初めて仏教というものが明瞭になってきたのでしょうか。

その当時、日本の仏教は、真実の仏様が私たちのところに来るという意味での「回向」という考え方は殆んどなかったのです。自分の力を人々に差し向けるという意味では使っていました。しかし、親鸞聖人は、仏様が私たちにその真実を回向するという、この回向のところにこそ真の仏教があるのだということを、生涯をかけて、明らかにしていこうと考え、決意されたのではないかと思います。生涯における「独立」の問題に大きく関わる出来事です。

それはいつ頃なのか。はっきりとはわかりません。しかし、早ければ29歳から35歳の間。遅くとも35歳から42歳の間と言えるでしょう。前者は法然上人と共にあって教えを聞いている時期です。

少し細かなことになりますが、この6年の間の出来事として、親鸞聖人が33歳の頃に、大変大事なことが法然上人と自分との間にあったと書物に書かれていることがあります。親鸞聖人は、書物は沢山ありますが自分のことはほとんど書かない人なのです。しかし33歳の時の出来事はとても詳しく書いています。

それは三つのことについてです。簡単に申します。一つは、法然上人が書かれた『せんたくほんがんにんぶつしゅう選択本願念仏集』という書物を書写することを許されるということです。法然上人の信頼を得ていることが分かります。6人ほど書写が許された中の一人だったのです。

二つ目は、さらに法然上人のお姿を絵に描くことも許されました。これはどうも親鸞聖人お一人だけだったようです。大変なことですね。親鸞聖人も、本当に有り難いこと、忝かたじけないことだと言われます。法然上人が親鸞聖人に「後は頼むぞ」と託されたわけですね。「自分の教えをどうか正しく継いでくれよ」と。このことは「涙なくしては書けません」と書いておられます。

そうだったと思いますね。お釈迦さまの真意を明らかにできなかった歴史の中で、七人の高僧、そして法然上人の教えを聞くことができ、仏教の真意が正しく伝わってきた。自分もそれがよくわかったということですから。大変な感動でしょう。個人的な感想を超えて、歴史的な感動というべきでしょう。

もう一つ、三番目です。謎の文章のようにも思えるものです。「法然上人がご自分で筆を持ってついに私の名前を書いて下さいました」と書かれているのです。さて、その名前がどんな名前なのか。「名の字」とだけあり、具体的にご本人が書きとめておられないものですから、分からないのです。これについてはいろいろな研究があります。その内容は今は省略しますが、それらを踏まえて、私は、その名とは「親鸞」だと思っています。

確証はありませんが、その理解でお話を進めてみます。親鸞聖人は33歳の時に「親鸞」と名告り始めた。それまではいくつも名前がありました。子供の頃の名前や、法然上人の所に行って上人からつけてもらったお名前もああったのですが、この時に聖人は初めて「親鸞」という名を名告ったのです。

それも法然上人が直々に筆を持って書いて下さいましたと言われるのですから、名を親鸞と名告るについては、事前に法然上人に対して、こういう理由があるからなのですと申し上げていたのでしょうね。法然先生からいただいていた名前はあるのだけれども、自分でこれからこういう名前で生きていきたいとお願いされたのでしょう。法然上人はその申し出を預かって、この弟子が「親鸞」と名のる理由なるものをよく考えられたのでしょう。その理由は、それは勿論推測ですけれども、「回向」ということが中心ではないかと思えます。

親鸞聖人はこのように言われたのかもしれない。「私はこれまで先生の教えをお聞きしてきて、お釈迦様の教えを正しく理解するカギは、「回向」ということではないかと思うようになりました。根源である真実の仏様が私の所に来たって、私を支えようとして下さっている。そのことに目覚めるということが私たちの救いのカギだと思うのです」と。

お釈迦様の教えを正しく受けとめられた「七高僧」(七人の高僧)の中に天親という方と曇鸞という方がおられます。文字を見ておわかりのように、親鸞聖人は、天親の「親」と曇鸞の「鸞」を、二人から一文字づつを頂戴して、「親鸞」と名乗ったであろうと言われています。これは、恐らく間違いのないでしょうね。

このお二人は、「回向」という教えを説かれました。お釈迦様の教えの本当の姿は何か、正しく理解するための一番大事なカギになるもの、それは「回向」だ。真実なる仏様が私たちのところにはたらきかけて来るということ。このことを、天親と曇鸞という方が具体的に説かれ、回向が大事だということを仰おっしゃった。そのとおりのことを自分自身も確信し、回向ということを中心にして真の仏教の全体の姿を明らかにしていくことを自分自身の生涯の課題にしていきたいと思うに至ったのです。

昨日「独立する力」ということでお話しましたね。「これが私ですと自分で名告って生きる」と。「これが私なんです」「これが私の課題なのです」「このことをするために私は生きているのです」と。親鸞聖人の場合は、お釈迦様の真実の教えを明らかにするカギが見つかった。それが回向。回向を中心に据すえて仏教の本当の姿を明らかにしたい。それを明らかにしていくのが私なのですと、自己自身を位置づけられたのだと思います。ここには本当に新たな親鸞聖人の誕生があります。存在の底からの誕生があります。

「親」と「鸞」、天親てんじんと曇鸞どんらん、自ら担った課題を人の名前で表しているのです。仏教の教えの内容で言えば「回向」ということ。ですから名前を「親鸞」と言わずに「回向」と言ってもいいかもしれない。それではあまりにも直接的ですけどね。

そのようなことを、法然上人に事前に願い出て申し上げたのではないかと推測すいそくされます。法然上人はそれをしばらく考えます。そして、この若い親鸞の言う通りだと、結論を出される。「親鸞の言う通り」というのも、じつは法然上人が教えを説いた通りなのです。そういうわけで、親鸞と名告っていくことを許可されるのです。

その許可も口で言えばいいようですが、法然上人は自ら名前を書いて与える。これは本当に「仏教は回向なんだよ」と。そして「お前しっかりやれよ」と。このようなバトンタッチの場面は本当に珍しいでしょうね。個人間のことを超えて、歴史的バトンタッチとでも言うべき場面でしょう。「これが私です」と親鸞聖人は自分で名告なられました。この課題を担になって解決していくのだと。ものすごく強い問題意識ですね。それが独立者・親鸞聖人の姿だと思います。皆さんも将来大切な問題をバトンタッチされるほどに歩んでいただきたいと思います。

しかし、一つ注意しないといけないのは、それでは親鸞聖人は法然上人よりも偉えらくなったのか。どうでしょう。物事は時間が経てば経つほど明らかになっていくわけですね。科学の進歩を見ればすぐ分かります。そうすると一番最近の人は全部わかっていることになりますから、昔の人より今の人のほうがはるかに偉いということになります。ここでは親鸞聖人が一番偉い。法然上人はその次ということになってしまう。

しかし、一番偉いのは、一番元の人、初めの人ということもあるでしょう。出発点の人が一番偉い。親鸞聖人は法然上人を我が先生と受けとめられた。その先生を「本師」というのです。この方がおられたからこそ私の救いはあるのだと、そういう方が本師です。「私を救う大事な真実の教えを、私はその方を通してお聞きすることができました。その教えによって私は救われました」そのように法然上人のことを仰いで、さらに、この方はじつは仏様の世界から現れたお方なのですとまで仰がれたのです。

回向の課題を担^{にな}って生きていくのが自分だと、明確な問題意識を持った独立者となった。仏教の一番大事な所がわかってきた。だからといって自分が一番偉^{えら}くなったというのではない。自分はどこまでも法然先生の弟子なのだとされます。法然上人が現れなかったら、このような自分が一体どうして救われようかと。その姿勢を親鸞聖人は一生涯通されたのです。

人はいつも「弟子」なのです。先生の弟子です。いつも教^こえを請う側、教^こえを説いて下さいとお願いをする側ですね。その弟子の位置に親鸞聖人は立ち続けられたのです。しかし、生涯「弟子」であるならば、それは独立者の姿と違うのではないかと思われるかもしれませんね。いいえ、それが独立者の姿なのです。独立者は威張^{いば}らないのです。頭が低いのです。人は独立者である前に、まず人間自身でなければならぬ。人間は、真実を前にして、どこまでも頭を下げ続けなければならぬほどの「真実ならざる者」なのですから。

この33歳の時が親鸞聖人の大きな出発の時ではなかったかと思えます。この出発は、人は何によって救われるのかという、最も根本の問題が明らかになってきたという意味での出発です。「親鸞」という名はそれを表わしているし、この名を生涯名のり続けて生きられたところに、人間存在の真の救いを課題にした者としての親鸞聖人の存在があるのだと思えます。

35歳のときに流罪になりますが、国から僧籍を剥奪され、藤井善信（ふじいよしぎね）という俗人の名を与えられます。しかし親鸞聖人は、当然それに甘んずることなく、自分の名を自分で名告^{なこ}っていかれる。それが親鸞聖人のご生涯にわたる正式なお名前となる「愚^ぐ禿^{とく}積^{しやく}親^{しん}鸞^{らん}」なのです。4年ほどの流罪の期間中に名告^{なこ}られたようです。

恐らく、流罪の前に「親鸞」という名前は決まっていた。この名が単に「名」だけでなく、親鸞聖人という人の存在の「核」だったわけです。その後、法然の教団が無実の罪で解散させられ、自らは越後に流されるという具体的な動きの中で、「愚^ぐ禿^{とく}積^{しやく}親^{しん}鸞^{らん}」が名のられたわけです。

「愚^ぐ」は、いかに自分が愚かな存在であるか。これは法然上人がいつも仰っておられたお言葉です。法然上人は、その時代で一番頭の良いお坊さんだったのです。日本のトップ。その方が私は愚かな存在ですと仰ったのです。なぜそう言われるのかが殆^{ほと}んどの人には分からなかった。それが親鸞聖人にはわかったのです。如来の前での「愚^ぐ」であったわけですね。

「禿^{とく}」の字は、五分刈りの頭のことで、「僧にあらず俗にあらず」ということで「禿^{とく}」と名のるのだと。僧侶の資格を失いましたが、だからといって、仏教の道を求めることをやめるというような問題ではないでしょう。人間であれば誰でも求めていかなければいけない道です。だから、俗人に帰っても、真実の道を求めることはやめないのだという強烈な意志の表現ですね。

親鸞聖人は「禿^{とく}」を自分の姓にしたのです。僧侶といっても一体誰がその資格を与えるのか。国が与えるのです。一寸筋が違うじゃないですか。国が与える「僧侶^{そうりよ}だ、

ぞくじん
俗人だ」という資格のところでは生きるのではなく、本当に一個の人間に立ち返って、
しょうがい
生涯、真実を求め抜いていくのだという、その宣言せんげんですね。

「釈しゃく」は仏弟子のことです。どこまでも教くわえを頂戴ちやうだいして生きていく存在となるのだと。そして自ら担かい、そこに立つ課題かだいを明らかにする内容が「親鸞めいりやう」です。真実なるものの回向くわうが人を救う、このことを明らかにしようと。課題は明瞭めいりやうになっているのです。

40歳前後にこの名のりりで親鸞聖人は立ち上がられます。そして42歳、関東へ行って20年間ほど教くわえを学びまた関東一円の人たちに説くという獅子奮迅ししふんの活動をなさって、京都に帰り、沢山のバラエティたかさに富とんだ様々な本を書かれます。「独立する力」というものを、親鸞聖人はこのように自分の中に獲得かくとくし発揮して歩いて行かれた。

本当にこれは、一個人の歩みいちごじんというよりも、時代が歩むすこというか、仏教が歩むすこというか、凄すこいものだと思います。このように歩まれた方がおられて、その教くわえを受けた人が沢山誕生して、またその歩みいちごじんの中から書物が書かれて、それが今日、私たちに伝わくわんにちってきているのですね。

仏教の教くわえは、ただ教くわえが伝わくわんったというのではない。このことは以前、細川先生という方が何度も仰おつしやっておられました。仏教はインドで起こります。そしてインドから中国に伝くわんわる。その間は西域せいぎの砂漠地帯さばくちたいが多い。その砂漠をラクダに『経典』を積つんで、キャラバンが移動して、それで『経典』が伝わくわんったという場面もあるでしょうけれど、しかしそのような形ばかりで伝わくわんったのではないのです。生涯その教くわえを聞きぬき守りぬいて、「これは真実の教くわえだからなんとか次なる人へ伝えたい。その伝えたいという願しょうがいいがあったのだ」ということを先生は何度も仰おつしやいましたね。

その伝えたいという願しょうがいい、インドから中国、日本へと教くわえを伝くわんえたのです。親鸞聖人もその生涯けつぎよくは、結局一言で言えば、「伝えたい」という願しょうがいいに生きられたのです。

4番目に挙げました「人のために尽くす力あ」。本当に人々に大事なものを伝えたい。人は皆同胞です。人類という仲間です。同じように生まれ、同じように生き、同じように苦勞をし、同じように救いを求めている者同士です。性格や境遇や職業などいろいろなものが違っていても、たいした違いではありません。根本は人間であるということです。その同胞に真実の教くわえを伝えようと猛然もうぜんと頑張がんぱつたった。90歳までね。健康でもあったんでしょけどね。それにも増まして伝えたいという願しょうがいいが燃え続けていたのしょう。深い課題なを担そうぜつった壮絶な歩み。これがあるから仏教は伝わくわんって行くのです。

一人一人の人が教くわえを聞いて、独立して、先どくりつず自分自身が道まを明らかにして、そしてそれを次の人に伝えて行くぞと。その人その人の生活があり仕事があり、その中で生涯をかけて歩いていく。一人ひとりが真実に出会うという確実な歩み。その歩みは本当に宝ですね。これがあるから仏教が伝わくわんって行くのですよ。

親鸞の「思った人、思ったこと」

順が後になりましたが、1 番目の「思う力」について親鸞聖人の場合を少し見てみましょう。親鸞聖人はご生涯において「どのような人のこと」を、あるいは、「どのような事をどのように思われたか」ということですね。

聖徳太子

先ず、聖徳太子のことをおもわれました。聖徳太子というお方は、親鸞聖人に先立つ550年位前の方ですね。この方のことを、聖人は一生涯おもしろく続けられました。9歳で出家して比叡山へ行かれますが、その比叡山での20年間、聖徳太子に深く出会われたということが想像されます。何故かと言いますと、この比叡山の道場は最澄が始めました。最澄は聖徳太子を非常に尊敬しておられた方なのです。聖徳太子が歩んだ仏教の道を自分も歩んでいこうということで、この道場を作ったのです。

そういうわけで、比叡山には聖徳太子を尊敬し、その教えを頂戴していこうという雰囲気満ちていたであろうと思われまふ。親鸞聖人が比叡山で修業なされたのは、最澄から約300年位後ですが、大きな影響を比叡山時代に受けられたであろうと思われまふ。こういう言い伝えがあるのです。

9歳から29歳のちょうど真ん中あたり、19歳の時に親鸞聖人は大阪の南の方にある聖徳太子のお墓に参籠に行きます。磯長の御廟です。ここには聖徳太子と奥様とお母様の3人の方のお墓があります。その時まで10年間ほど頑張ってきたのですが、親鸞聖人にはまだ道が見つかりません。それで聖徳太子の所へ行つたというわけですね。

そこで夢告を得ました。夢の中に聖徳太子が現れて、あることを告げて下さった。無告というのは、ただ眠っている中で夢を見て、誰かが現れて何かを言ったということではなくて、何度も何度も、自分のこれまでの歩み、何か問題はなかったか、何が真実の道なのだろうか、これからどうすればいいのだろうか、と考えに考えて、考え抜いたあげくに答えが出た。それが夢となって現れたということではないかと思ひまふ。

聖徳太子が現れて「善信善信、真の菩薩よ」あなたは本当に真の菩薩である。本当の求道者である。よくぞ10年間頑張つたと。「汝の命根十余歳」あなたの命はあと10年だと。あと10年は少なくとも歩いていきなさいということでしょうか。「さらに10年」という期間を親鸞聖人はそこで受けとめたのです。

聖徳太子は夢に現れてそのように仰つた。親鸞聖人の中では夢告通り10年しっかり頑張つて、それでも道が見つからないならば……。そこはもう生きるか死ぬかというような、10年後の時点に断崖絶壁を設け、その10年を歩いていくような感じだったかもしれませぬ。漫然と歩んだのではないのです。その10年の歩みは、この言い伝えによれば、常に聖徳太子と向き合つた10年だったのです。

無告を受けとめられてか、実際10年経つた29歳のその年の最後の日まで頑張つたようですね。親鸞聖人の心の中に、自分はあと10年後の12月の大晦日までやるんだという思いがあつたのもしれませぬ。

しかし、その10年を頑張り通して求めて歩んでも、それでも道は見つからなかったのです。強靱な精神ですね。9歳より20年間、真実の道を求めて、自己自身に忠実に、誤魔化すことなく歩みぬいたのです。どれだけくじけそうな心が起きたでしょうか。しかし、そのたびに立ち直り立ち上がり、再出発して歩まれたのでしょうか。この20年の比叡山での歩みは、親鸞聖人のご生涯において、とても貴重なものであったに違いありません。

20年の歩みに区切りをつけて、29歳の時、六角堂に参籠します。この六角堂も聖徳太子と深い関わりがあります。聖徳太子が建立されたのです。親鸞聖人が仰っているお言葉があるのですが、六角堂の建物の基礎を作る時、土を固めますね。それを聖徳太子が来られて固められたのだと言われる。「未来の有情利せんとして 六角の土壇つきたまい」と。御本尊は久世観音菩薩。これが聖徳太子の具体的な現れなのだという思いで、この仏様の前で100日間参籠するのです。そこで無告を通して聖徳太子に遇われたのですね。

聖徳太子というお方は、日本という国の仏教の一番の礎、根本となるお方なのです。親鸞聖人は重大な人生の岐路にさしかかれば、聖徳太子のもとへ行って、真剣に考えを推し進めて道を尋ねたのです。

後に62歳で関東から京都へ帰られまして90歳までたくさんの書物を書かれます。その中に「和讃」があります。いつもみんなで歌う「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」これも「和讃」の一つですね。七五調でリズムカル。仏法の教えを易しく、難しい教えを和らげて讃えた。この和讃を親鸞聖人はたくさん作られました。

その中、聖徳太子についての和讃を、83歳の時に75首作られます。4行で一首ですね。それを75首作られるのです。聖徳太子を讃えた和讃です。さらに、85歳の時に114首、そして86歳で11首、計200首。じつに200首もの和讃を作られたのですよ。これは大変なことです。

そのように聖徳太子のことを生涯にわたって深くおもしろい続けられました。

人々の苦しみ

たくさんの人々が、大変な苦しみに陥っている。そのことを親鸞聖人は強く思われて、何とかしてその人たちを救いたいという思いを、その人たちに向けられました。実際にこういうことがあったようです。

42歳まで流罪で越後にいましたね。それから関東へ移られます。日本地図が思い浮かぶでしょう。新潟県からずっと茨城県辺りに移っていかれる途中で、こういうことがあったようです。道中は、病気で、あるいは食べものが無くて倒れていく人、倒れてもう亡くなっている人たちがたくさんいるのです。その人たちの中を、親鸞聖人は家族を連れて関東へ向かわれます。

出会うたびに、その人たちの苦しみを何とかしたい、仏教に出会った者として何とかしたい。どうすればいいだろうかと、聖人はいろいろ考えてこういうことを思いつかれたのです。

それは、三部経さんぶきょうと言われる『経典きょうてん』があって、私たちの念仏の教えの、一番大事な経典です。この三つの経典きょうてんを千回読もうという願いを起こしたのです。その功德によって人々の苦しみを和らげようと思ったのですね。それはある意味で、親鸞聖人の切なる願いだったのです。

しかし、自分自身が経典きょうてんを千回読んでも、それで直接ちよくせつ人々の苦しみが無くなるという事は殆んどないでしょう。その自分の考え方の間違いに気付いたのですね。自分はまだそういうことを考えている。そうではなくて、私たちを一番根源こんげんで支える仏様の願い、真実なる願い、この願いが苦しんでいるその人たちにかけているのだということを伝えなければいけない。苦しんでいる人がそれを知って、そのことに目覚めれば、苦しい状況の中でなお立ち上がって仏様を仰いでいくことができる。その本来ほんらいの道をいつの間にか忘れて、何という自分だったかと恥じるのです。そういうことが42歳のこの頃にあったようですね。あれは間違いだったと、後に59歳の頃、改めて振り返られています。

方法は違っても、そのように人々を思う思いは強いものがありました。さらにまた、『教行信証きょうぎょうしんしやう』という書物の中の一節を見てみましょう。これは親鸞聖人が書かれた中で一番中心の書物と言えるものです。その中に、私たちすべての者に対して、すなわち人生に苦しんで生きるしかない私たちに対して、本当の優しさやさというか愛情をこめて丁寧ていねいに呼びかけている表現があります。実際の文章は省略しますが、次のような趣旨です。

「あなた方は、何とかこの人生を本当に生きていこうと思って、真実を求めて歩んでいるでしょう。けれどもまだ道が見つからないのではありませんか。明らかになったものはどの位ですか。大切なことは、真実の教えを説くよき人に出会って、真実なる仏様が私たちに示している道を歩むということです」と。この二つのことを勧められるのです。

「よき人に出会って教えを聞き、仏様の示す道をどうか歩んで貰もらいたいのです。このことを忘れて皆さんは、人生を自分でどうにかしようとしているではありませんか。それで空回りからまわしているではありませんか」こう仰って、さらに、では、よき人が何を具体的に説かれ、仏様の示す道というのは具体的に何なのか、もっと焦点を絞しぼって、「仏様の真実まごころに触れて、私を救おうという仏様の願いを戴いて生きていくのですよ」と。つまり仏様のお心をおもいながら念仏して生きていくのですよと言われるのです。

「よき人の教えを聞くのですよ。仏様の示す道を歩むのですよ。具体的には念仏申すすして歩むのですよ。ここにあなた方が真実に出会って生きる道があるのですよ」と勧め下ささっているのです。親鸞聖人はものすごく幅広い所から、それを絞しぼって一番中心の核心を押さえ、それが念仏なのだ。

このようにして、親鸞聖人は、自分もかつてはそうだった。求めても求めても確かなものを得ることはできなかった。どこに間違いがあったのかが法然上人の教えに出会って、ついにわかったのです。そこから苦しむ人々に対して、真実の道を伝えずにはおれない人になったのです。

反対する人、弾圧する人

法然上人や親鸞聖人が歩まれた念仏の道を、「それは間違いだ」と反対する人がいました。反対で終わらずに弾圧する人さえいました。親鸞聖人が35歳の時に属していた法然上人の教団が弾圧されます。他の仏教者の訴えを聞き入れた朝廷から弾圧されます。そして教団は解散。もう念仏申してはいけないと。何人かの人が死刑になり、何人かの人は流罪になった。全くの無実なのにです。親鸞聖人も流罪になったのですよ。

そうすると流罪にさせられた側の者としてどんな思いが起ころうでしょうか。普通であれば「この野郎！」と思うでしょう。弾圧する側の人には仏教がわかってなかったのです。法然の教団が盛況になるものだから、嫉妬に思い、腹が立った。腹立ち紛れに念仏の教団を弾圧したのです。腹が立って物事を決めるなんてどういうことでしょうか。そういう大変なことが起こったのです。人間社会の矛盾というものがここに吹き出しているのですよ。

では、被害を受けた親鸞聖人は自分たちを弾圧した人たちのことをどう思ったか。結論は「共に歩もう」ということだったのです。いかがですか。解散させられ、流罪に処せられたから、この仕返しをするぞというのが親鸞聖人の思われたことではないのです。「真実の道を共に歩もう」。このように呼びかけるところに真実の道がある。弾圧されようと無視されようと、何をされようと真実の道を歩むのだ。恨みを返しても、根本的な解決にはならない。両者が救われず、苦しみの底にいよいよ落ち込んで行くだけ。「共に真実の道を歩んでいきましょう、いつか必ずわかります」。そのように聖人はその人たちに対して思い続けられ、願い続けられたのです。

法然上人

親鸞聖人はまた、ご自分の先生でありました法然上人のことを思われました。これは当然のことです。法然上人も比叡山におられたのですが、43歳の時に念仏がよくわかるようになった。それで比叡山を降りて京都の町で念仏の集いを始めたのです。そして300人を超える、いろいろな人が集まってくるようになった。

その当時は仏教と言えば僧侶のもの、貴族のもの、男性のものだったのです。それが法然上人のもとにはどんな人でも来ていいのだと。女性も来ました、いろいろな職業の人でも来ました。当時における大変な宗教革命ですね。それが43歳の時です。43歳と言えば親鸞聖人は3歳。比叡山時代の20年の間に、法然上人が京都の町で盛んに念仏の教えを説いて、いろいろな人が集まっている不思議な場所があるぞ、ということとは皆の知るところだったのでしょうか。

親鸞聖人も法然という人が説いている教えはどんな教えなんだろう、自分たちの教えとどう違うのだろうと関心は持っていたでしょうね。そして結局 29 歳で法然上人の所へ行かれる。35 歳の時に教団が解散させられ、法然上人と別れ別れになります。それ以降再び会うことはありませんでした。41 歳の時に法然上人は亡くなります。

そして 52 歳の時に、もう一度比叡山の僧侶たちが念仏はおかしい、と言い出して、もう一回朝廷に申し出るということが起こるのです。きっかけは法然上人が亡くなって、主著が広く刊行されたことです。そうすると既成仏教の人たちがそれを見ることになったということがあるのです。

明恵^{みょうえ}という人が「法然上人の書物は全く間違っている」と言って強烈に批判します。明恵という人は学識の高い偉い人ですから、影響力が強くていろいろな人にそれが伝わっていきます。一方、解散をさせられた念仏の教団は、その時は火が消えかかっているのですが、すべての人が死刑や流罪になった訳ではありませんから、残った人たちがまた念仏を広めようとする。復活しつつあるような念仏の教団に対して、明恵が言うように比叡山の人もまた念仏は大間違いだと言い出す。それを受けた朝廷側は親鸞 55 歳の時にもう一度弾圧をするのです。

一番目の弾圧^{しやうげん}が承元の法難^{ほうなん}、そしてこの二番目の弾圧^{かろく}を嘉禄の法難と言います。「もう念仏申してはいけない」というのが中心ですが、間違った教えを説いた法然上人の死骸を掘り起こして加茂川に投げ捨てようとしたんです。埋葬されて 13 年もたっているのですよ。その情報を察知^{さつち}した念仏の教団側^{さへ}の人が、ほんのタッチの差で先に行って遺体^ほを掘り起こして京都のある所で丁寧に荼毘^{だび}に付したのです。それが法然上人の 13 回忌の年なのです。

この時親鸞聖人は関東にいますけれども、京都では再び大きな念仏禁止の法難という、あつてはならないことが起こって、法然上人の遺体はそのような目にあわされそうになった。これをこのままにしていたら、念仏の教えが日本からなくなってしまうと親鸞聖人は強く思われたのでしょう。本当になくなってしまっていたかもしれません。

そこで 13 回忌という節目を迎えて、親鸞聖人は法然上人のことを本当に深く思っていて、ご恩^{おん}に報いなければいけないというお気持ちが強く起こったであろうと推測^{すいそく}されます。仏教の現状はこんな大変なことになっている。日本から真の仏教が無くなるかもしれない。念仏がなくなったら、これ以後の人は誰も救われなわけですよ。こんなことが起こっていいものか。親鸞聖人は大変な使命感^{しめいかん}を思われたのです。それも「おもう力」ですね。

自分には大きな仕事があるのだ。念仏の教えに出会った者は誰しも、大きな仕事があるのだと言って、親鸞聖人は自分なりにその仕事を果たしていこうと書き始められたのが『教行信証』^{きやうぎやうしんしやう}という書物なのです。そして 75 才、76 才、その辺りまでには大体できていたであろうと言われます。20 年余りかけて、書いてはまた考え、書いてはまた考えて、いろいろな箇所に修正を加えながら書き続けていかれたのです。

法然上人のお徳を思いご恩を思う。そのお徳の背後には、法然上人との個人的な関係においてのご恩に報いようというのではなくて、一番根本は仏様。仏様は阿弥陀仏。

私たちの根源となって私を支える、私を生かして下さる大きな大きな真実の力です。その阿弥陀仏という仏様の力、それを法然上人が私に教えて下さったのだと。そのご恩に^{こた}応えていく。

さらにその奥は仏様に出遇った。仏様のはたらきを頂いた、その仏様のご恩に^{こた}応えていく。そういう聖人の思いは実に明瞭で強く、親鸞聖人とはどのようなお方ですかと尋ねられれば、ご恩に報いる思いを明瞭に持っていた人と答えればいいのではないかと私は思っています。阿弥陀仏のご恩、そして先生である法然上人のご恩をよくよく感じて、これに^{こた}応えていこうとされたお方ですね。

親鸞の「人のために尽くす力」

最後に、4番目の「人のために尽くす力」ということです。親鸞聖人がいろいろな人生の段階で人々のために尽くされたということがありますが、特に62歳で京都へ帰られまして、たくさんの書物を書かれます。その書物の内容を見ると^{おどろ}驚かされます。

世界に伝える

書かれた書物を分類しますと、先ず一つ目が「世界に伝えよう」という精神で、世界的なレベルで書かれました。その文章は「^{かんぶん}漢文」です。当時は世界といっても地球全体の世界というよりも、ほとんど中国ですね。中国の人が使っている言葉が世界共通語のような感じだったのでしょう。聖人は世界に伝えたい真実の道はここにあるのだという思いだったのでしょう。

真実なるものがあらゆる人々よと呼びかけているのだから、その内容を漢文で書いて、すべての人に伝えようとなさった。今で言えば英文で書いたようなものです。大きな^{ふへんてき}普遍的な願いというものを親鸞聖人は持つておられた。

さらに田舎の文字もよく読めない愚かな人々に伝えようとなさった。聖人は次のように仰います。

「田舎の人々の文字の心も知らず あさましき愚痴の極まりなき故に やすく心得させんとて 同じことを度々問い返し問い返し書きつけたり」

と言って、いくつかの書物を、それも内容は経典の言葉とか、先輩方の教えを自分で詳しく解説したものを平仮名で書くのです。これなら分かり易いでしょうね。

それから、先ほど申しました「和讃」があります。「和」というのは和語であり和らげるということでもあります。大和ことば、日本の元々の言葉。仏教の言葉は漢文で書いてありますから、その難しさを和らげて、そして七五調という調子を踏んで書かれる。そして「讚嘆」、「ここに素晴らしい真実の教えがありますよ」とその教えを褒め讃える。そういう和讃を作られました。

これは適当な節をつけて日常生活の中で口ずさむことができる。それによって知らず知らずのうちに深い教えに^{なじ}馴染んでいける。聖人はこの和讃を生涯の間に500首余り作られました。大変な努力です。その内容は本当に仏教の教えの大事な所を分かりやすく作られました。そのうち200首が聖徳太子の和讃でしたね。

さらに「お手紙」。聖人が京都に帰られましたから、20年ほどいた関東で共に歩んだ人がたくさんいる。その関東に残された人たちがいろいろな疑問を尋ねる手紙を出すのです。それに対して聖人が丁寧に答えられます。長い手紙もあります。そこは本当に丁寧に答えていかれた。今日残っている手紙は40通余りありますね。もっともあってたのでしょうけどね。それから直接関東の人たちが京都にいる聖人の所へ尋ねに行った。その当時ですから片道一か月近くかかる、そういう危険な旅をしてでも聖人の所へ尋ねに行った。その再々の訪問にも聖人は丁寧に応えていかれる。

そういうように親鸞聖人がご晩年、特に京都へ帰られて本当に人々のために尽くされた。書かれたものを見ると、あらゆる人にあらゆる次元で、なんとか真実の仏教がわかってもらいたいという願いと工夫と実行力が溢れているように思えます。この方はご生涯を見て骨太の感じがしますが、この辺りはものすごくフレキシブルで柔らかい。どんな硬いものも、柔らかいものも何でも来いです。何とか人々に伝えたい、そのために、晩年の30年を使われたのです。

すみおか や こう 住岡夜晃先生

いろいろな方のことを思って貰ったらいいと思います。そして皆さん、自分自身の生きる力というものをよく考えてみられるといいと思います。

親鸞聖人の教えを、それから700年、800年後になって今私たちが具体的にこういう場でお聞きすることができるのです。このような教えを聞く場が具体的にしなければ、教えは聞けないのですよ。こういう場があるのは当然のような感じがするかもしれませんが、では作ってごらんなさいと言われても、とてもできるものではないですよ。作るのが難しいその場を具体的に作って下さったのが住岡夜晃先生という方ですね。

住岡夜晃先生というお方の生涯は54年という比較的短いものですが、その夜晃先生のご生涯を仮に今のこの4つの視点で見ると、またいろいろなことが思われます。親鸞聖人と同じようなことになると言っていいかも知れませんね。特徴的に感じるのは、「思う」のは、住岡夜晃先生は、阿弥陀のご恩も親鸞聖人のご恩も強く思われたと同時に、私たち一人一人のことをものすごく細やかに、丁寧に思われました。

それをどういう表現で言っているか、一応私は「丁寧」と普通の表現で受けとめていますが、丁寧に一人一人のお同朋のことを思うということが、ものすごく大事だったのです。そういうことをなさったのが住岡夜晃先生です。夜晃先生も学ばれました。夜晃先生のお部屋は夜なかなか電気が消えないんですよ。12時、1時、2時までね。朝はまた早いのですよ。

夜晃先生は小学校の教員をされていたのです。広島県の豊平という所ですね。今、豊平道場がある所の近くです。23歳の時に自分の近くの青年たちに「皆さんそれでいいのですか」と、頑張って真実を求めていこうという手紙を出したのです。そして翌年24歳の時から光明団という聞法の道場を始めたのです。それは本当に独立者の姿でしょう。

24歳で聞法の道場を始め、どんどん盛んになっていって29歳の時に親鸞聖人と言えば、法難のようなことが起こったのです。夜晃先生はご家族を連れて豊平の奥から広島市へ出られた。教員を辞めて、仏教の教えを学んで伝えていくことに専念しようとなさった。大変な独立心ですね。

それで生涯を人々のために尽くされたのです。尽くして尽くして全国を回って、骨身を砕くように心をこめて教えを説き抜かれたのです。当時ですから食べ物も十分ではない。交通機関も十分ではない。山奥の地へ行く時など途中まで馬に乗せて貰^{もら}って、馬が行けなくなったら背中に負われて行かれたと言われます。その会が行われる所へ、聞きに行く人も山を越え、弁当を二食か三食持って行ったのだと。お話が夜終わって、自分の家へ帰り着いたら朝だったという話も聞きました。そのような苛酷な会座の連続で、文字通り自分の命を燃焼^{ねんしょう}し尽されて54歳で亡くなられたのです。そういう人が出られて、仏教は伝わっていくのですね。ありがたくもまた申し訳ないことです。

「君に生きる力はあるか」こういう題でお話させて頂きました。皆さんのこれからの歩みに、ご参考になれば、有り難いと思います。これからも、この仏教の教えを聞いて共に歩んでいきたいと思います。お話はこれで終わります。

